星見山中プログラム

ななお蝶

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

中学生達が最後の一人になるまでクラスメートと殺し合いをするというデスゲームものです。

昔、自分が書いていたオリバトを気まぐれにサルベージして連載するものです。

一部改変しましたが、当時の若くも痛々しい感じをほぼそのままにしております。

この昔の恥ずかしい作品を呼び起こして、何とも言えない気持ちになる雰囲気を一緒に楽しんでみませんか？

目次

1．生徒名簿 ―― 1
2．朝の夢 ―― 5
3．予感 ―― 9
4．選手宣誓 ―― 16
5．number one ―― 19
6．銃が好きだった。 ―― 23
7．ラッキー ガール ―― 28
8．仲良し二人 ―― 32
9．検証中 ―― 39
10．命の選択 ―― 43
11．smile ―― 47
12．くまさん ―― 54
13．勘違い ―― 58
14．本当にストーカ参上。 ―― 64
15．♪♪♪ ―― 69
16．探索 ―― 75
17．火災発生。 ―― 79
18．許さない ―― 84
19．変な ―― 90
20．苦手 ―― 94
21．銃にも勝てる勝利方 ―― 98
22．カウントダウン ―― 103
23．日本刀vsゴルフクラブ ―― 107
24．再起不能 ―― 112
25．臆病者 ―― 117

26．活躍しない主人公 ―― 122
27．脱出組 ―― 127
28．それぞれの道 ―― 131
29．危機一髪ゲーム ―― 139
30．冷たい目 ―― 145
31．再会 ―― 153
32．一人身の称号 ―― 160
33．あなたは友達を信じますか？ 166
34．ウイリアムさん。 ―― 170
35．暴走 ―― 175

1．生徒名簿

あなただったらどうしますか？
もう、それは選ばれてしまったこと。
僕達はそこから逃げる事は出来なかった。
全員が助かる道はなかったのか……
３年２組代表　海名

【男子】

天根　俊谷　アマネ　トシヤ　（男子１番）
海名　小卯　ウミナ　コウ　（男子２番）
襟裳　良　エリモ　リョウ　（男子３番）
烏丸　智野　カラスマ　トモノ　（男子４番）
空東　千秋　カラトウ　チアキ　（男子５番）
木蛇　鉄瑠　キダ　テツル　（男子６番）
古月　昌成　コゲツ　マサナリ　（男子７番）
芝見沢　朝陽　シバミザワ　アサヒ　（男子８番）

奏草　浅之　ソソウ　アサユキ　（男子９番）
鷹代　仁　タカシロ　ジン　（男子１０番）
津家　貴史　ツゲ　タカシ　（男子１１番）
七来　卓味　ナナキ　タクミ　（男子１２番）
鳴子　尋　ナルコ　ヒロ　（男子１３番）
弐羽　一木　ニワ　イツキ　（男子１４番）
音島　清人　ネジマ　セイユウ　（男子１５番）
壁智　明流　ヘキチ　アキル　（男子１６番）
棒葉　宰春　ホウバ　サイシュン　（男子１７番）
水田　太一朗　ミズタ　タイチロウ　（男子１８番）
群咲　馬胡　ムレサキ　マコ　（男子１９番）
湯唾　森輔　ユツバ　シンスケ　（男子２０番）
四川　八須尾　ヨシカワ　ヤスオ　（男子２１番）

【女子】

安瀬　紗奈　アセ　サナ　（女子１番）
岩敷　李阿　イワシキ　リア　（女子２番）
江口　みほの　エグチ　ミホノ　（女子３番）

沖ノ島　恵子　オキノシマ　ケイコ（女子４番）
佐羽　静枝　サワ　シズエ（女子５番）
朱守　調　シュシュ　シラベ（女子６番）
素乃　真穂子　スノ　マホコ（女子７番）
聖礼　千歳　セイレイ　チトセ（女子８番）
船崖　珠未　センガイ　タマミ（女子９番）
竹原　香　タケハラ　カオ（女子１０番）
千葉　碧海　チバ　アオミ（女子１１番）
散倉　央　チリクラ　ナカバ（女子１２番）
徹田屋　江菜　テッタヤ　エナ（女子１３番）
藤真　鈴華　トウマ　スズカ（女子１４番）
中添　史織　ナカゾエ　シオリ（女子１５番）
西　瀬里奈　ニシ　セリナ（女子１６番）
干村　友木　ヒムラ　ユウキ（女子１７番）
鳳凰寺　由利　ホウオウジ　ユリ（女子１８番）
練磨　牡丹　レンマ　ボタン（女子１９番）
枠　望夢　ワク　ノゾム（女子２０番）

我村　雪絵　　ワムラ　ユキエ　（女子２１番）
【計４２名】　　星見山第二中学校３年２組

尚、この物語は……

昔、自分が書いていたオリバトを気まぐれにサルベージして連載するものです。

一部改変しましたが、当時の若くも痛々しい感じをほぼそのままにしておりますので、大人になった今考えればあり得ないような描写などをお楽しみください。

原作バトル・ロワイアルやその作者の方とは関係はございませんので、予めご了承ください。これはフィクションです。実在の人物や団体などとは関係ありません。ご注意ください。

2．朝の夢

眠い。お腹がすいた。僕は何を考えているんだろう。

ジリリリリリリリ――――!!

大きな目覚ましの音。

僕の眠りはそこでさまたげたれた。

今日……

そうだ、今日は星三山第2中学校の修学旅行の日。だからって何かが変わる訳じゃ無い。

「いってきます」

なんてことない挨拶で家を出る。そしていつものように学校に到着する。

「おはよう」

到着するなり、クラスでも一番と言っていいほど明るい女子の佐羽　静枝（女子5番）が真っ先に声をかけてきた。

「バスの席は自由に座っていいって」

「???」

一体この子は何を伝えたいのだろう。自分にとってそれは決して重要な話でもなかった。

「あ、そう。ありがとう」

まぁ、情報屋の彼女の事だから、少しでも誰かに情報を伝えたいと言う気持ちがあるのかもしれない。

そう思うことにして僕は軽くお礼を言うことにした。

彼女は満足そうな様子でまた別の人にこの情報を伝えに走り去っていった。

「はーい。みなさん、急いでバス乗ってください」

しばらくすると先生の呼びかけが聞こえた。その声とともに僕こと海名　小卯（男子2番）を含む生徒達はバスに乗った。

＝＝＝

「えっと……どこ座ろうかな?」

バスに乗ると早速、海名　小卯（男子2番）は席を探した。

バスに乗り込むのが比較的遅かった小卯は開いている席を探すのなんかにも手間がかかっていた。

自由な席でいいと言われたものだからみんなはそれぞれ、自分の座りたい席に座って

いる。おかげで、後から乗りこんだ人間は開いている席を探すだけでも大変なのだ。

ばしっ

「?!」

後ろから軽く雑誌のようなもので叩かれた。

それに驚いた、小卯は後ろを振り向いた。

「おせーぞ、小卯。お前の席は俺がちゃんと用意しておいたからな」

そこには小卯の友達の壁智　明流（男子１６番）が少しにやけながら席を空けていた。

「ありがとう、悪いね。わざわざ……」

「まっ俺ってやさしーからな」

二人の席は後ろから3番目右列。

隣を見ると先ほど声をかけて来た佐羽　静枝（女子５番）が親友の中添　史織（女子１５番）と一緒に座っていた。

同じく、前の席では授業中いつも熟睡の天根　俊谷（男子１番）がお決まりのポーズで寝ている。

隣に座っている津家　貴史（男子１１番）なんかは、天根の枕にされて、とっても迷惑そうだった。

一番後ろの席はよく見えないが、あの高い声から判断すると我村　雪絵（女子２１番）

そしていつも驚いてばかりいる江口　みほの（女子３番）、体育会系の干村　友木（女子１７番）……

他にも何人かいるようだがその時、小卯の視界にはもう何も写ってはいなかった。

みんなは今、深い眠りの底に落ちている。

もちろんこれから始まる悲惨な出来事は誰も知る由がなかった。

バスは一台だけ違う方向に走っていた。

【残り４２人】

3．予感

何も見えない暗闇の中で意識が朦朧としている。
岩敷　李阿（女子２番）は嫌な予感を感じていた。彼女の勘は結構当たる。
コツ
「な、なに？」
何かの当たった感触。
李阿は、ストレートの黒くて長い髪をなびかせながら後ろを振り向いた。
見まわすとみんながイスに座りいつもの席順どおりに寝ていた。
でも、いつもの様子とはやはり何かが違う。おかしい。
コツ　コツ
もう一度何かの当たる音。
「……誰か。起きてるの？」
自分の右斜め後ろの席だった。
見るとさっきまでは気づかなかったが天根　俊谷（男子１番）がめずらしく起きてい

る。
「やっと起きたか。さっきから起こしてるのにみんな起きねぇ……お前で起きたのは一人目。あ、違うな。俺の次で二人目か」
二人目と言う事はこの人も寝ていたという事か。
言われてみると、確かに天根は短くてぼざぼさした寝癖が立っている。さっきまで寝ていたと言われればそんな気もする。
では、一体誰が彼を起こしたのか？
一度寝たらなかなか起きないこの男を起こす事が出来るのはクラスでただ二人。
一人目は水田　太一朗（男子１８番）。彼は歌が大好きでマイクをもったら離さない。そんな彼の素晴らしい（？）歌声が天根　俊谷（男子１番）の眠りを妨げる事はよくある。
しかし、どうやらそれではないらしい。
ならば二人目。
李阿の視線が今度は左斜め後ろにそれた。
「津家君」
津家　貴史（男子１１番）はクラスではあまり目立つ方の人間ではない。
綺麗に整った黒い髪の毛と生まれのよさそうな顔立ち。彼は存在感はある人だった。

たぶん存在感があると感じているのは、顔が少なからずとも悪くないと言うのが理由だろう。
彼に好意を抱いている女子がいるという話はよく聞いていた。それに対して、本人はあまり関心を持っていないようだが。
「ツゲが俺の事も起こしてくれたんだよ。殴って！」
天根はわざとらしく、津家の方をにらみつけた。でも、悪意はこもっていないようだと李阿は思った。
この二人は仲が良い。なので、たぶん何をやっても許せるのだろう。
「……寝てるお前が悪い」
「悪いったって……ま、いいや早く他の奴らも起こしてやらないと」
そう天根が言った時だった。
「きゃーっっ!!　何コレぇ?!」
前の席の方で、天根が声をかけるよりも早く誰かが起きたらしい。
その声をきっかけにみんながどんどん起きはじめた。
ざわざわ　ざわざわ
次第に騒ぎが大きくなっていく。すると……
ばんっ

まるで生きているように教室の扉が勢いよく開いた。
「お前ら!!　早く、ここから逃げろ！　今すぐだ!!」
ものすごい形相で入ってきたのは担任の芝尼　針生先生だった。
＝＝
――『逃げろ』ってどういう事だ？
海名　小卯（男子２番）は必死にその答えを探していた。
もちろんその言葉の意味はわかる。しかし、その状況がわからない。
誰かの叫び声と共に起きたと思えばいきなりこれである。
これではたぶん表向きクラス一頭のいいとされる音島　清人（男子１５番）にも分からないだろう。
「い……いいか……お前らはプログラムに……」
息を切らしながら必死に何かを伝えようとしている先生。
――『プログラム』？　もしかして……
嫌な考えが頭の中をよぎった。
「と、とりあえず早くここを出ましょう。みんな私の指示に……」
学級委員の沖ノ島　恵子（女子４番）が叫んだ。いつもはおっとりしているがこういう判断は賢明だ。

その時だった。
だんっ　だんっ
赤い火花が自分達のいる教室に入って来たのだ。
＝＝
飛び入る弾丸。
それを岩敷　李阿（女子２番）はしっかり見ていた。
嫌な予感、それはこの事だったのだ。
どこからともなく入って来た弾丸は先生の腹部と心臓めがけて当たった。
「う、うわっ」
先生のうめき声が教室中に響く。
一瞬だけとても教室が静かになった。
「きゃーっ！　早く、早く手当てしなきゃ」
誰かの声を皮切りに再び教室が騒がしくなっていく。
先生の周りに数名の女子が集まる。
けれど、李阿はそんな気にはなれなかった。
「は、早く、病院に行こう。ここに居たら間に合わない」
沖ノ島　恵子（女子４番）の判断の声。それを受けて先生をみんなは教室から運び出

そうと動き始めていた。しかし……

ばんっ　ばん　ばん

再度の銃声。

今度は先生を担ぎ上げた生徒の肩をかすめた。そして、最後の一発が先生の心臓に確実に当たった。

そこからは誰が見ても、一目で分かるくらいのおびただしい量の血液。

やがて、先生は動かなくなった。

それと同時に教室に２０代半ばの男が入って来た。

「みなさん、静かにしなさい」

顔は笑っているものの、とてつもない威圧感。

私の勘はやはり当たる。

とても悪い予感。気持ちが悪い。

その男はにこやかに笑って告げた。

「この人は罪を犯しました。まぁどっちみちこうなる運命かな？　あっ自己紹介が遅れましたね。

僕の名前は『国守　誠』この国をしっかり守るのがお仕事です。でも、今回はみなさんの担任になります」

状況を飲み込める者は誰もいない。
ざわざわ
教室はまた、ざわつき始めた。
「みんな、何もわかっていないみたいだね。とりあえず説明するから一旦全員、席に戻ろうね」
そう言うと国守　誠は拳銃を取り出した。
「ひっ」
それを見て、先生が動かなくなって周りで泣いていた女の子たちもゆっくりではあるが席についた。
「それでは全員着席したね。みんなこれを知っているかな？」
誠は黒板にしっかりと『ＢＲ法』という文字を書いた。
そしてその時、私の隣の席の海名　小卯（男子２番）がうつむきながら悲しそうな目をしていた。
ねぇ、小卯君はもしかして、何か知っているの？
ねぇ、私にも教えて。これから、起こる事……
【残り４２人】

4．選手宣誓

『ＢＲ法』。

その文字を見てクラス全員がしんと静まり返る。

「最近は少年犯罪が増えてきています、それにより上のえらい方々が心配しました。このままでは国が駄目になってしまうと。……はい、そこで考えられたのがこのＢＲ法です」

ＢＲ法により毎年中学３年生の５０クラスが選ばれ、殺し合いをさせられる。殺し合いはそのクラスの生徒が一人になるまで続く……

「みんな、おめでとう。君達はその『プログラム』に選ばれたんだよ」

誠が本当に嬉しそうな笑顔をクラスにふりまく。

普通ならここで抵抗もするものだが、先ほどの芝尼　針生先生を見た生徒達はとてもおとなしくなっていた。

「それじゃ次にルールを説明するね。いやー今年の生徒達はみんなおとなしくて良かった。ちなみにコイツはクズでーす。こんな大人にはならないでね」

そう言うと、ふところから拳銃を取り出して針生先生の方に2～3発の銃を放った。
一番前の席に座っていた西　瀬里奈（女子１６番）は絶えられず耳をおさえた。
「今みなさんのいる場所はこんな形の山に囲まれた所です。周りは高圧電流が流れているので逃げる事は考えないでね。この決まった範囲で戦います。制限時間は3日」
誠は黒板に三角形の地図のような物を描き、自分達のいると思われるところに×印をかいた。
「みなさんにはデイバッグが支給されます。そして、その中には地図、食料、そして武器が入っています。武器はランダムなので選べませんよ。女の子でも戦えるよう平等になっている訳です。これでみんなは戦う訳ですね」
『戦う?』『冗談もほどほどにしてほしい。
海名　小卯（男子2番）は怒りを通り越してあきれていた。
『このクラスに戦う人なんているはずない』そういう確信があった。
「出席番号順に男女は交互に出発してもらいます。あ、5分置きにね。だからってみんなの事を待って団結しようなんて考えない方がいいよ。もしも3日間以内に最後の一人にならなかったら君達のつけている首輪が爆発するからね」
そこでようやく、生徒の何名かが始めて首元に付いている不気味な銀色の物体に気づく。

「毎日３回、禁止エリアと死んだ人の名前も呼ばれます。禁止エリアっていうのは首輪が自動的に爆発する地域の事をいいます。次第に増えていくからね。この学校もみんなが出発して３０分が過ぎたら禁止エリアになっちゃうよ～」

やけに楽しそうな説明の声が癇に障った。

「それじゃ説明はこのぐらいかな？　じゃそろそろ始めようか」

すると、教室の前の扉が開いてそこからごついおじさん達がワゴンとともに入って来た。

ワゴンのうえに乗ってる黒い物体がデイバッグなのだろう。

「名前を呼びまーす。呼ばれたら元気良く返事をして下さいね。一番……」

【残り４２人】

5．number one

「一番……」
この『一番』という響きは今まで私の人生の中でとても好きなものだった。
けれどそれは今、世界の中で最も嫌いな言葉になろうとしている。

「安瀬　紗奈さん」
安瀬　紗奈（女子1番）は先生に呼ばれた。
「はっ……はい！」
ちょっととまどいながらの返事。
だって、いきなり『殺し合い』をする？　そんな事言われても困る。
紗奈は未だにこの状況を飲み込む気はなかった。
「じゃあ彼から荷物を受け取ってね」
「……」
誠からの一言に無言で席を立ちあがる。

飲み込むかどうかは関係ない、そう言わんばかりの空気を感じた。
紗奈が教室の前の方に歩いていくと、恐そうな軍隊の服を着た男の人が一人、紗奈に黒いデイバッグを渡した。
「おっと……」
ずっしりと重い感触。紗奈は少し足元がもつれ、よろけてしまう。
体勢を整えながら、あらためて手にしたデイバッグのじっと見つめた。
夜闇のようにどす黒く何の温かみも無い荷物。この中には人を殺す道具が入っている。
紗奈は考えていた。
生き残るためにはそれを使って人を殺すしかないと。
でも、そんなの絶対に嫌だ！　私は誰も殺さない、と。
彼女の頭の中で、否定と肯定の言葉が何度も何度も繰り返される。
――絶対に殺さない。
最後に行きついたのはそこだった。
それは紗奈が日頃から善良な人間で、親からも愛されていた環境にあったからであろう。
――絶対に殺さないんだから。

もう一度、心の中でしっかりとそう誓って教室を出ようとした時だった、先生代理人の国守　誠の声が聞こえたのは。

「あ！　みなさんに言い忘れてましたがこのクラスにはもう殺し合いをやる気の人がいるかもしれませんよ。みんなは敵ですよ」

なんて最悪な言葉なんだろう。紗奈は首を小さく振り自分に言い聞かせる。

――そんな言葉で私はだまされない。私だけでもみんなを信じる。

硬く誓う。

――そうだ、教室を出る前にみんなの顔を見ておこう。これで自信もつく。

ゆっくりと体を半回転させ、教室の中を振り返った。

そして、見てしまった。

木蛇　鉄瑠（男子６番）と奏草　浅之（男子９番）、群咲　馬胡（男子１９番）そして芝見沢　朝陽（男子８番）の四人が謎の笑みを浮かべていたのを……

「……」

何か胸に突き刺さるような思いがこみ上げる。あんな誓いを立てたばかりなのに、この人たちはもしかしたら、あの男の言う通り『やる気』のではないかと疑いさえしてしまった。

――私に、信じる事さえ出来れば……

紗奈は黙って廊下の向こうへと消えていった。
こうして一人目が校舎の外に出た。
時刻は夕方の５時ジャストだった。
死のゲーム・開始
【残り４２人】

6．銃が好きだった。

「次は男子一番、天根　俊谷君……」
「……はい」
次々とみんなの名前が呼ばれていく。一人５分なんていう時間はあっという間だった。
海名　小卯（男子２番）の名前もすぐに呼ばれる。
「次、海名　小卯君」
「はい」
自分は出発がみんなよりも早い。
それを生かせばこの殺し合いなんてすぐに終わらせられる。
僕は、ごついオジサンから投げられたデイバックを受け取って外に出た。
自分の次以降（江口　みほのより後ろ）を待って全員で何かしらの方法を探せばいい。
――こんな最悪な『プログラム』なんて終わらせてやる。
僕はそう思い、外でみんなを待ち伏せしようとした。

もしかしたら、自分の前にも出発した人が自分を待っていてくれているかもしれないとも思った。
でも、現実は違かったらしい。
外には誰も居なかった。
もしかして、前に出た3人は既にこのゲームに『乗って』いるのだろうか？
そうだとしても僕は――
最初の人が出発して、もう15分が経っていた。
＝＝
「おかしい」
もう、自分が外に出てからさらに15分が経っている。
それなのに、江口　みほの（女子3番）、襟裳　良（男子3番）、沖ノ島　恵子（女子4番）のうち誰も学校の玄関から出てきた気配がしない。
――これはもしかして夢だったのか？　それともドッキリ？
あるいは、中で何らかの理由で3人とも殺されてしまったのか？　現に担任の芝尼針生先生が何らかの理由で殺されていた。
どちらにしてもこんな物騒な冗談はやめて欲しかった。
でももし、次に現れなかったらその時は……

そこまで考えて、僕は首を左右に振り、さっきまで考えていたことをかき消した。
――どうなってるんだ。
再び、玄関の方を見る。
「あっ」
ちょうどそこに誰か黒い人影がよぎった。
「あいつは……」
目線の先にいた人影は烏丸　智野（男子４番）だった。彼が今さっき、玄関から出てきたのだ。
「おーい、智野～」
僕はとりあえず呼びとめた。
智野とは別に親しくも無いが、仲が悪いわけでもない。だから、別に智野だって僕を怪しむ事は無いだろう。
一人目の仲間をゲットするチャンス。
アイツがやる気だったら話は別だけど、もちろん智野がやる気の人間なワケがない。僕はそれを信じる。
そうこう考えている間に、智野は徐々に近づいてきていた。
――ん？　右手に何かを持っている？　え、ちょっと、それってまさか。

彼が近づくにつれ、右手に持っているものの正体が分かり始めた。
そう、それは『銃』だった。
なんの躊躇もなさそうに、黙って智野はこちらへと銃を向けた。
――おい、冗談だろ？
ばぁん
大きな銃声が聞こえる。弾は右頬の横をすり抜けていった。間一髪。それはそのまま木に当たる。
銃弾の風圧で頬が少しちりちりと傷んだ気がした。
「智野……お前、なんでそんな事するんだよ」
――まさか、最初にやっと現れたと思ったとたんにこれか。
信じられなかった。やる気の人間じゃないと……智野は仲間だ、と信じていたのに。大きく裏切られる結果になるなんて。
――やめろよ、それをこっちに向けるなよ。
どう考えても、智野は銃を向けていた。それは、どう見ても『やる気』の合図だった。
「……すっ……すごいなぁ……これ。やっぱり本物は違う……」
やたらと興奮している智野はそう言うと、再び銃の先をこっちに向けた。
「おい、智野!!　聞いてるのか!?　おい！」

必死で呼びかける。でも、そんな声は智野の耳にちっとも届いちゃいないようだった。

こいつはクラスではそんなに目立つやつでもない、いつも大人しくしている感じのヤツだったのに。

――そんな智野がなんで？

「……ちっ」

仕方なくその銃から次の弾が飛び出る前にこの場を立ち去る事に決めた。

幸い、智野は追ってくる様子はなかった。

――嘘だ。こんなの絶対に嘘に決まってる。そっか、夢だ。今朝見た夢の続きなんだ。

そう自分にそう言い聞かせた。

しかし、頬はまだ、智野に撃たれた衝撃でひりひりしていた。

その事が確実にここが現実なんだと、自分にそれを証明していた。

【残り４２人】

7．ラッキー　ガール

＝民家にて……＝

「あー寒い。寒い」

手をこすり合わせながら竹原　香（女子１０番）は民家にあった毛布に包まっていた。

運の良い事に、この家には誰もいる様子がなかった。

香は南の方からの転校生であり寒さにめっぽう弱い。彼女にとって、今の外の空気は冷たくてとっても辛いものであった。

それがどうしても絶えられず、ゲーム開始早々、自分の体を温めることが出来る場所を探していた。そこで見つけたのがこの民家である。

運の良い事に、玄関の鍵は開いていた。おかげで簡単に家の中にも入る事が出来た。

家の中はもちろん電気・ガス・水道はついていない。でも、ここなら禁止エリアにならない限りは拠点にできるだろう。（食料もあるし）

そう香は考えていた。香の甘い考えはまだまだエスカレートしていく。

おまけに、もしかしたらココに隠れていれば運良く最後まで残っていられるのかもしれない。

――もし、そうだったら私、ラッキー！

ちなみにデイバッグの中には武器のボウガンが入っていた。

――コレで来た敵だって楽勝♪♪　玄関さえ見張っていればいいのよね。玄関から入って来た人にとってはアンラッキーだけど、本当に私はラッキー。

「さぁて食料でも食べますかっ♪」

香はさっそく、パンをちぎった。

口の中いっぱいにパンほおばる自分。どこか楽しい所にいるような気分だった。

「これ意外と美味しいか……ぐっ……」

呑気にパンを品評し始めた時だった。香は体に激痛を感じた。

パンが喉に詰まったのかも知れない。

そう思った香は水を飲み込もうと床に置いたペットボトルに手を伸ばそうした。しかし、体はぴくりとも動かなかった。

この時なんと、香の頭上には大きな斧が刺さっていたのである。

頭はぱっくりと二つに割れている。香には自分に何が起こったかは分からなかった。

いや、理解出来なかったと言った方がいい。

何が起きたかも分からないまま、香の意識ははるか彼方へと飛んだ。

どさっ

倒れる香の姿を見て、背後からは三つの人影が現れる。
それは木蛇　鉄瑠（男子６番）芝見沢　朝陽（男子８番）奏草　浅之（男子９番）の三人であった。
「さっすがお前スゲーな」
木蛇が言った。彼はおしゃれな猫みたいに髪の毛を撫でつけながら、けらけらと笑っていた。
次第にその誇らしげな笑みは光に照らされあらわになっていく。
「お前の作戦成功だな」
その声は奏草だ。少年はゆるやかに拍手送っている。
「まぁ、二人の道具のおかげだよ」
朝陽が返した。
今回のこの男こそ、この残酷な物語を思いついた張本人。
玄関の鍵が開いていた民家。そこにはもう先客がいたのだ。
木蛇の斧、奏草のピッキングセット……（芝見沢は漫才のつっこみ用スリッパだった）
三人は誰かが安心して入って来れるように鍵を開け待ち構えていた。そこに現れたのが香だったのである。
全てはお遊びの作戦。

頭に刺さった斧を抜き、にやりと不気味な笑みを浮かべる三人。返り血を多少浴びていたが誰も気にはしなかった。

――そう、彼らはゲームに乗っている。

危険。

【ラッキーガール・竹原　香（女子１０番）死亡】

【残り４１人】

8．仲良し二人

＝学校西門付近＝

「瀬里奈～早く出てきてよ……私、一人じゃ寂しいよ」

門の影に隠れながら友達を待つ徹田屋　江菜（女子１３番）。

しかし、友達の西　瀬里奈（女子１６番）は自分よりも出席番号が後ろにある。

彼女と再会するためには、まだ後６人くらいこの場で待たなければならないのであった。

「あぁ私ったら、こんな事して待ってる間に殺されちゃったらどうしよう」

それなら一人で行動すればいいだけなのに、江菜は彼女を待っている。

昔、友達に裏切られイジメのターゲットにされた江菜、出来ることなら自分からは友達を裏切りたくないのだ。

それでも一人でいるのはやはり心細い。

――こんなことして、誰かに後ろから襲われたらどうしよう。もしそうなったら私だって……

江菜はデイバックの中にある包丁を握りしめた。

とんとん
江菜の肩を何者かが叩いた。
――誰か、いる？
彼女の心臓はばくんと大きく鳴った。
「だ、誰!?」
驚いた江菜は、ついさっき握り締めた包丁を思いきり振りまわした。
包丁は江菜の力により、思いきり、しかも無差別に動きまわる。包丁を振り回された相手はいいものじゃない。
「わっ馬鹿、やめろ。俺だ、俺。別に危害加えねーよ」
江菜に声をかけた人物、鳴子　尋（男子13番）はそう言ってとっさに5歩ほど後退した。
その声を聞き、ふと我に返った江菜は急いで手に持っていた包丁を離した。
「ご……ごめんなさい。鳴子君」
「死ぬかと思った」
たまたま知った顔に声をかけたがために殺されてしまうなんて、不運にもほどがある。
鳴子は両手を広げ、敵意はないというポーズをとった。

「そ、それで私に何の用？」
まだ若干警戒したような面持ちで江菜が尋ねる。
彼女はたいして鳴子と関わりを持っていなかった。
それでも対話に応じようとしたのは、友達の瀬里奈が鳴子と仲が良かったからだろう。
鳴子　尋。彼は親友の弐羽　一木（男子１４番）といつも一緒に行動していた。
人のよさそうな顔、いつもにこにこというよりはへらへら笑っていて、何を考えているかはよく分からない。
「江菜さんはここで何をやっているの？」
そんな事を江菜が考えているうちに、鳴子は江菜に質問を投げかけた。
「私は……瀬里奈を待っているの」
「あぁ……あいつか」
何か考えたように鳴子は少し静止する。
その時だった。
「おい、尋」
再び背後から別の声が届く。
先ほどとは違い一人では無かったので、心に余裕が生まれたらしい江菜は「誰かな？」

と、若干気軽な気持ちで声のする方へ振り返る。
「あ、弐羽」
それは鳴子の友達、弐羽　一木だった。
銀縁の眼鏡、制服のボタンは几帳面に一番上までしまっている。
「こんなところで何してるんだよ」
「それがさぁ」
それから鳴子は、江菜が友達の瀬里奈を待っているという話を弐羽にも伝えた。
混乱して包丁を振りまわした事を言わなかったことは彼女にとって幸いといえよう。
普段は結構乱暴な事を言っている鳴子だがこういう時は気を使ってくれたらしいという事に、江菜は心の中で感謝の言葉を述べた。
「なるほど……」
眼鏡をふきながら、とりあえずといった感じで話を聞いて3分。一通り事情を理解した弐羽は眼鏡をかけ直し顔をあげた。
「それじゃ、まず、お前らはここから離れなきゃな」
何を考えたか、弐羽はそんな事を言う。
「え、どうして?」
江菜は面白く無さそうな表情を浮かべる。

――自称・学年一の学力だかなんだか知らないがヒドイ事をいうなぁ。鳴子君の話を聞いていなかったの？　私は、瀬里奈を待っているのに……

疑問を感じたのは彼女だけではない。

「そうだよ、弐羽。お前本当は馬鹿か？」

鳴子君もまた江菜と同様の想いを感じていた。

「まだ話の途中」

二人の気持ちを呆れたように制する弐羽。

一呼吸おいて、言葉を続けた。

「ここは校門付近だろ？　万が一やる気のヤツがここに戻ってきたらどうするんだ？　ココは目立ちすぎる」

二人は辺りを見回した。

確かによく見るとここには校門がぽつんとあるだけ。大抵の人ならすぐに隠れていた（つもり）の私を見つけてしまうだろう。言われるまで考えつかなかった。

江菜は少しだけ反省した。

「弐羽君、頭いいね!!」

はしゃいだ調子で彼の状況判断を称賛する。

「……」

「ん？　あれ、二人ともどうかした？」
　二人の生み出す間に小首を傾げる。
「いや、そんな声出して誰かに見つかったら危険でしょ」
　弐羽は冷静にツッコミを入れる。
「あっ、そうだったごめーん」
『……天然』
　弐羽と鳴子の声はみごとハモっていた。
　その後、すぐさま3人は少し離れた草むらの影に隠れた。
「尋と江菜さんはここに行っててくれ」
　そう言うと弐羽は地図上にある小屋を丸でかこんだ。
　そして、二人に向けて四角い箱を差し出す。それは探知機だった。
「これは半径１０ｍ以内に誰かが居ると反応してランプが光る」
　四角い箱の画面には簡単なこの辺の座標とランプが3つ点いていた。今、ここにいる3人の事だ。
「俺は後から合流する」
　鈍い光を発しながら、眼鏡の彼はそう言った。
「後からってお前は何する気だよ？」

少し不機嫌そうに鳴子が訊ねる。
「俺は瀬里奈を待って一緒にそっちに向う。……ほら、早く行け」
そう言うと弐羽は手でしっしっと犬を追い払うようなそぶりを見せた。
「……わかった。弐羽……ちゃんと来いよな」
「わーかってる」
そうして、鳴子と江菜は小屋へとむかった。
そんな中江菜は、『男の友情っていいな』なんてのん気なことを考えていたのであった。
【残り４１人】

9．検証中

＝海名　小卯（男子２番）、某所にて＝

だ……ぶ……？

誰かの声が聞こえる。

僕の意識は、まだぼんやりとしていた。

――あれ、僕は何してたんだっけ。

次第に頭の中のぼんやりした霧は晴れていく。徐々に視界がはっきりしていく。

『大丈夫か？』

僕を呼ぶその声が、今度ははっきりと聞こえた。

「……あっ」

僕は小さく声をもらした。

目の前に居たのは友達の壁智　明流（男子１６番）だった。

変わりもしない黒くて長めの髪。意地の悪そうな目。いつも僕を馬鹿にする声。それは、僕の知っている壁智　明流そのものだった。

「お前どうしてあんな所にいたんだよ」
僕の顔をのぞき込むようにして、明流が訊ねる。
「それは……」
そう言われて僕は思い出した。あの智野が銃を撃ってきた事を。
そして、それから逃げてひたすら走っていた事を。その途中で……
――そうだ！　その途中で転んだんだ。
「……転んだ」
僕は答えた。
多少ぼーっとしていたためか答えが単刀直入すぎたが。
そう言えばおでこが痛い、転んだ拍子にぶつけたらしい。
「はぁ～転んだぁ～???」
何言ってるんだこいつって感じで明流が聞き返した。
その後、僕はゆっくり体をおこしながら、詳しく事情を話した。
その時分かった事だが僕は当初転んだ場所から大きく移動していた。倒れている僕を発見した明流が、人のいなさそうな所に運んでくれたらしい。
運良く深い草むらだったのが幸いし、他の人には発見されなかったようだ。
「でも、なんで……智野が……」

そう考えるととても恐かった。あの時、智野は異常だった。平気な顔で僕に銃を向け、僕の声も聞かずに撃った。撃った。撃った。

人、自分以外の人間が、何を考えているのか分からなくなった。

僕はパニックを起こす寸前だったような気がする。

「多分あいつの事だからな」

明流は何か知ってるらしい。渋々と困ったような口調で言葉を続ける。

「あいつはアレだ、銃マニアだったからな」

「そういえば」

そう言われて僕は一つ思いだした。

智野の異様に高揚した声。

確かにあの時、智野は何かに喜んでいたのだ。

「もしかして試し打ちでもしてた……？」

ポツリと僕は言葉をもらす。

もしかしたら興奮のあまり周りも気にせず、試し打ちをしただけなのかもしれない。別にやる気ではなかった。だから、逃げる自分を追わなかった。

単なる銃マニアの智野。

無理やりそうやって都合のいい言い訳を自分自身に言い聞かせると、僕は深くため息

をついた。
『はぁ……』
体の魂がぬけるようなため息のあとには、しばし、沈黙が続いた。
ばん　ばん
そんな状況も束の間、今度は、その沈黙を２発の銃声が打ち破った。
【残り４１人】

１０．命の選択

小卯達が銃声に気付くちょっと前、古月　昌成（男子７番）はある決断を迫られていた。

そう、それは……

１．大親友こと棒葉　宰春（男子１７番）からの誘い

２．自分の彼女こと練磨　牡丹（女子１９番）の誘い

この二つの誘いの内、どちらの誘いに乗るべきかというものだった。

みんなが一人一人教室から出て行く最中、昌成はこの二人から、こっそり手紙を貰っていたのだ。

「うーん、どっちにしよう」

普段からとても優しい性格の昌成はこの決断をかれこれ二時間くらい決めかねていた。

「……よし。決めた」

やっとのことで決意し顔をあげる昌成。彼はまず、彼女の所に行く事に決めた。

もちろん大親友も裏切るはずがない。牡丹を仲間にした後、宰春を仲間にしにいくの

だ。
彼はそう決断すると、今居る場所から待ち合わせの場所に向い力の限り走った。

【一方その頃】
「古月君、早く来ないかな？」
練磨　牡丹（女子１９番）は待っていた。
――こんな恐ろしい殺し合い、したくない。あーあの頃は良かったな……
クラスの中では付き合ってる事は内緒だった。
だから放課後、こっそり話したりするのがとても楽しかった。
そんな、なにげないやりとりをする事が大好きだった。
出来れば全員で助かりたい、みんなと生きて帰りたい。
考えると涙が出てきそうだった。牡丹も昌成と同様、誰よりも優しい女の子だった。
「……遅いな」
およそ、古月が校舎を出発してからは随分の時間が経っている。どうしたのだろうか？　私に愛想でもつかして、ココには来ないつもりなのだろうか？　そんなの嫌だ。
牡丹に大きな不安の波が押し寄せた。
その時だった。

がさっがさっ
後ろから草むらをかきわける音。
「古月君!!」
牡丹は立ち上がり、振り向いた。古月である事を心より信じて。
しかし、そこに立っていたのは彼女が思い描いていた彼ではなかった。
そこに立っていた少女、それは牡丹の親友、我村　雪絵（女子２１番）だった。
「雪絵っ」
小柄でどこかまだ幼さが残る顔の雪絵。
学校ではいつも一緒に行動し、まるで自分の妹であるかのように牡丹は彼女をよく可愛がっていた。
けれど今の雪絵は牡丹の知っている彼女とは何か様子がおかしい。
「それ、何……?」
雪絵と呼ばれたその少女は、小さな両手でマシンガン（イングラムＭ１１）を握り締めていた。
「ゆ……ゆきえ……?」
月の光に照らされて、草むらの影から出てきた少女の顔……さっきまでは暗くてよく見えなかったその顔が、今は嫌と言うほどはっきりと見えた。

それは今まで知っている親友の我村　雪絵とは全くの別人。マシンガンという鉄の人形を抱えた、残酷な少女の顔だった。

カシャッッ

雪絵はマシンガンの銃口を真っ直ぐ牡丹に向けた。

何かがおかしい……牡丹はそう頭で理解するよりも先に、目の前の少女はなんの躊躇もなく引き金を絞った。

パラララララ……

銃口からは一気に弾が出る。それ真っ直ぐ牡丹めがけて突き進む。

映画やドラマで見たような派手なパフォーマンスとは違う。冗談じゃない。

本気だ。

【残り４１人】

11．smile

無数の銃弾が浴びせられた。
私がイメージしていたものとは違う。
体が軽い。そっか……私は死んだのか……。死ぬってそんなに痛くないんだ。悲しくないんだ。

でも、最後に会いたかったな……
練磨　牡丹（女子19番）はなんとも言えない体の軽さと温かさを感じていた。手にはべたべたした
不思議な赤い物がついている。
「あれ？」
死んだと思っていたが痛みはちっともなかった。血が出ているのに痛くは無い。おかしいな。私は今雪絵に撃たれて死んだんじゃなかったかな？
あれ、目の前に……目の前に誰かいる。誰かが自分を抱きかかえてくれている？
ずるり

それはゆっくりと音もたてずに崩れ落ちる。
その正体が彼氏の古月　昌成（男子７番）だと気付くのに、そんなに時間はかからなかった。
「あっ……」
「ま……間に合って……良かっ……た」
途切れ途切れに話しかける声。それはまさしく彼の声。
私が死ぬことよりも恐れていた事。
自分の大事な人が死んでしまう事。
自分の体が裂かれるよりも、自分の体が焼かれるよりも、何をされるよりも一番辛い事。
「古月君!?」
そう叫んで必死に崩れ倒れた古月を抱き起こした。
嫌な事など想像してはいけない。それなのに牡丹の頭の中には次から次へと嫌なイメージが浮かんでくる。世界の破滅のような光景が何度も繰り返されていく。
「や、やだ。大丈夫？　ねぇ、冗談でしょ??」
「……」
返事は返って来なかった。体に開いた無数の穴からは無残にも血がどくどく流れ出

ている。
彼の返事の代わりに返ってくるのは、あの醜い銃声だけ。
パララララララ……
また、悪夢の銃声が鳴った。
「やめて、雪絵！　やめて」
体の中から出せるだけの声を出した。
ぴたっ
銃声が止む。
「よ、よかった」
牡丹はほっと安堵した。
――よかった。雪絵だってきっと、錯乱していたんだよね？　そうでしょ？　ね？
しかし、銃声は一瞬止んだもののすぐにまた、パララララと鳴り出し始める。
その時だった。
ばん　ばん
とても大きな銃声が立て続け二発鳴り響いた。
一発は雪絵の腕に軽く命中する。
雪絵は驚いた表情を浮かべ、そのまま草むらの奥へと逃げて行った。

「アハハッアハハッ」
暗闇の奥からは雪絵の不気味な特徴のある笑い声がこだましていた。普段の雪絵ではない事は明確だった。
「ぼ……た……ん……さん」
かすれかすれの弱弱しい声が残された少女の名を呼んだ。
「えっ、えっ？」
パニックになる牡丹の頭。咄嗟に返事が出てこない。
こんな大事な時に混乱するなんて、ああなんてお馬鹿な頭なんだろう。
「危険な……目にあわせてごめ……ん」
「そんな事ない！」
そう言って彼女はかなりオーバーに首を横に振った。
「危険じゃなかったよ。守ってくれたじゃない」
涙をこらえ、必死に答える。
本当はこの場になんかいてもたってもいられる心境じゃなかった。でも駄目だ。私が冷静にならなきゃ、これが最後の会話にはなりたくないよ。
唇を噛みながら自分を奮い立たせる。
「笑って……」

古月は途切れ途切れの声でそう言った。
けれど笑えるわけがなかった。だって目の前で大事な人が今にも危ない状況なのだから……
「笑ってよ……僕は、今嬉しいんだから。最後まで一番大事な人を守れて、僕は君の笑顔が好き……」
ぶつん。話はそこで途切れた。
「あ、あああ……」
言葉にならない声が漏れる。
そのとき牡丹の頭の中で何かがふつっと切れた。
昌成の温かさは次第に失われていった。
【古月　昌成（男子７番）・銃殺。死亡】
――アシタモ、イツモドウリアナタニアエルトオモッタノニ

「あ、あの」
背後から誰かの声がした。
「そっちに行っていい？　大丈夫、君に危害を加えるつもりはないから」
その声の主は昌成の親友、棒葉　宰春（男子１７番）であった。

彼の手に持たれている銃から判断して、雪絵に撃たれそうになった牡丹を助けた二発の銃声も、彼の行動だと伺えた。

「古月……」

宰春は昌成に歩み寄り、そっとまぶたを閉じた。ほっそりとした、宰春の顔からは、一筋の涙が流れる。

ひと時の静寂が訪れた。

それから何分経っただろうか。静かに宰春が口を開いた。

「あっ、あのっ牡丹さん」

少しあがり気味な宰春の声。

「こ、これからどうするの？　もし、良かったらぼ……」

ざくっ

気味の悪い、何かの裂けるような鈍い音。

それは、あっという間の出来事すぎて、宰春は自分に起こっている出来事を理解するのに時間がかかってしまった。

考えたくない事実と共にゆっくりと違和感の感じた場所を目で追う。

絶対に一番あって欲しくない出来事……

宰春の喉にはナイフが一本突き刺さっていた。牡丹に支給されたサバイバルナイフ。

「……っ」

もう声には出せなかったが、宰春は目で訴えていた。『どうして？』と。

隣でナイフをつき立てた牡丹が、彼の顔を見ながら言った。

「私、決めたの。これ以上、大事な人を殺されたくない。大事な人は私が殺す。後悔しないために」

牡丹はそう言うと、二人のデイバッグから自分に必要だと思うものだけを回収し始めた。

「じゃあ私、もう行くね」

その場を去る際、牡丹は二人に微笑みかけた。その笑顔は殺人を決めたとは思えない、とても魅力的な微笑みだった。

――ごめん、昌成……俺じゃ駄目みたい。お前じゃないと牡丹さん、止められない。

その思いとともに、宰春の心音はゆっくり遠のく。

【棒葉　宰春（男子１７番）・呼吸困難。死亡】

【残り３９人】

１２．くまさん

さっきの銃声が聞こえてから、もう1時間が経った。

「つなんだよ、クソ。本当にこのゲームに乗ってる奴がいるってゆうのかよ」

海名　小卯（男子２番）は悔しそうに木を叩いた。

風も無いのに木はゆれ、そこからは少しの花粉が落ちた。『へくしゅっ』と明流はくしゃみをする。

「さぁーな？　智野みたいに銃が好きだった奴なんじゃぁないのか？」

鼻をむずむずさせた壁智　明流（男子１６番）は気休めにそう言った。あくまで、気休めに。

銃声が聞こえた時、小卯と明流はすぐさまそちらへ向おうとしたが、今は夜、見つける事は不可能に等しかった。結局、こうして元いた場所に戻ってきたのである。

「……」

「……」

今までの出来事があまりにも非現実的過ぎて会話も当然のことながら楽しめない。

明流は大木に腰かけて支給されたパンを一つかじった。

「もしさ……」
口を開いたのは小卯だった。
小卯は頭をくしゃくしゃにかきながら何かを切り出そうとしていた。とても深刻な顔だった。
そんな顔は幼稚園からずっと一緒の明流でさえ見たことがない。
「何？」
明流は彼の言葉を阻害しないよう、軽く首をかしげるだけにとどめた。
「もし、僕たちクラスにやる気のあるやつが居たとしても、俺は……俺は殺さないからな」
ああなんだ、そんなことか。
「当然」
小卯の発言に対し、明流は口元に笑みを浮かべ即言葉を返した。
そして今度は明流が言う。
「俺も。まぁ、なんとしてでも、全員でここから脱出する……かな？」
「同感」
小卯も即答だった。
「じゃあとりあえず今はパンでも食べようぜ」

「そうだな」
そう言うと小卯はディパッグから、自分用のパンを探し始めた。
夜はますます更けていった。
【残り３９人】

アハハッ、アハハッ!!　やった、やった一人殺した。
ゲームだよ！　これはゲーム！　駄目だよ、牡丹。甘い事言っちゃ。私みたいなのに殺されちゃうよ？
我村　雪絵（女子２１番）はだたひたすら笑っていた。
普段から別に人が死ぬとかそういう事に興味はなかった。
みんなは泣くけど何が悲しいのかわからなかった。
今回の『プログラム』もそうだ。生き残った人が帰れるとかには全く興味はない。ただ、楽しいから。
雪絵にとって『プログラム』はめったに味わえない本格的なゲームだった。
「よし、これで大丈夫」
雪絵はそう言うと木に、さっき撃たれた所から出た血で『くまさんの絵』を描いた。
それから『くまさん』の下に『一』と付け加える。

さぁ、そろそろ血もおさまったしゲーム再開しようかな。

牡丹、また、どこかで出会えるといいね♪

それまでに、私、いっぱい、いっぱい、人、殺しちゃうから。

【残り３９人】

１３．勘違い

「よっこいしょ」
近所に住むおばさんのような声を出しながら、学校から３００ｍほど離れた地点の草むらに藤真　鈴華（女子１４番）は腰を下ろした。
基本的に動く事が嫌いな彼女は３００ｍ歩いただけでも十分な運動になっていた。
「しかし……なんでこんな事に参加させられちゃうかなぁ～」
つまらない。そんな風に言いたげに鈴華は支給されたデイバックを覗き込んだ。
どうせ、中にはたいしたものは入っていない。
さっき確認した時に入っていたもの。
パン……面白くない。
水……これも面白くない。
地図……ぜーんぜん面白くない！
ああなんて凡庸なんだろう。実に実に実に面白くないものばかりだった。
そして、極めつけは武器！

藤真　鈴華に支給された武器……無かった。

――政府の人が忘れる事もあるんだねぇ

鈴華は鼻で笑った。

それはそれでギャグかな？　なんて。普通の人とは違う事が出来て面白い、なんて。そんな事を考えながら。

ヤバい事だと気付いたのはそれからしばらくしてのことだった。なんと銃声が聞こえたのだ。ゲームに乗ってる人がいる。じゃあ自分が殺されるかもしれないじゃないか。

――ま、そういう人がいても仕方ないけどね。少なくとも私の友人達はそうだろうなー

一時はその危険性から恐怖を感じた鈴華だが、しばらくして慣れてしまったのかそんな事をぼーっと考えるに至っていた。

さく　さく　さく

――あ。

誰かが近くをゆっくり歩いている。足音に気付いた鈴華だが逃げる様子は無かった。

――移動するの面倒だな。

ただそれだけだった。ただそれだけのために、鈴華は逃げずにいたのだ。

さく

ついにその足音が自分の前で止まる。伏せていた顔をあげ、鈴華はその足音の主を確認した。

「えっと、群咲君だよね」

鈴華の前に現れた人物、それは群咲　馬胡（男子１９番）だった。

『木蛇・芝見沢・奏草』の決して真面目とは言えないグループに属している彼。

頭はいつも坊主で、はたから見ればお坊さんみたいに見えなくもない。

鈴華はなんとなくこういった種類の人間が好きにはなれなかった。

――いやぁ……だってこの人はどう考えたって。

鈴華はまじまじと群咲の手元を見た。なぜなら、群咲の手には銃（ワルサーＰＰＫ）が握られていたからだ。

――やっぱり……

「やっぱり、私、君に殺されるって？」

「……」

無言だった。彼はもう、確実に鈴華を殺す気でいるのだ。

かちゃ

額に銃口が当てられた。

鈴華は反撃する気も逃げる気もなかった。
まぁ、逃げればもちろん撃たれてしまうだろうし、反撃してもやはり撃たれてしまう。それだったら、動かなくてもやっぱり同じだと考えたからだ。
――私の人生あっけないなぁ。
いよいよ引き金が握られる、その時だった。
ばぁん
耳にはっきりと残る大きな銃声が響く。鈴華は確実に撃たれたのだと思った。もう死後の世界をさまよっているのかと思った。
しかし、それは間違いだった。
撃たれていたのは群咲の方であり、鈴華ではなかったのだ。
「え？　ええ？」
誰が彼を撃ったのか。辺りを見まわしてみたが誰も見つけることは出来なかった。
――なんで私じゃなくてこの人が死んだんだろ。うーん気になる。そもそも一体誰がそんな事を……？
鈴華は腕組をして考えた。けれど答えは分からない。
――私にはストーカでもついていて、私のピンチに助けに現れてくれたのかな？
そんな適当な理由を考えた。

「ま、なんでもいいけど」
鈴華は再び群咲へと視線を移した。
不気味なほど正確に頭を打ち抜かれている彼は、ほぼ即死だったに違いない。
――群咲君、可哀想に。
鈴華は目を細めた。
主人を無くした銃が一丁寂し気に転がっている。
「こんなぶっそうな物」
そう言って鈴華は群咲の銃を土に埋めた。単純に危ないから。
実のところ元々あまり争い事が好きではない鈴華にとって、武器があろうとなかろうと関係は無いものだった。だって結局はこうするのだから。
――全くもって面白くない。
それから、鈴華は群咲に支給されたパンを１口食べた。
「さてと、そろそろ移動しますか」
自分に最低限必要な物を持ち、藤真　鈴華はさらに３００ｍ北へ進む事にした。
【群咲　馬胡（男子１９番）・射殺・死亡】

＝＝＝

「いけない、いけない。また、撃っちゃった。せっかく本物が手に入ったんだから大事にしなきゃ」

藤真　鈴華（女子１４番）の所から２０ｍ離れた木の影に烏丸　智野（男子４番）はいた。

別に鈴華がいてピンチだったから助けたわけじゃない。

『ただ、試し撃ちがしたかった』だけ。

それが、おそらく運悪く群咲　馬胡（男子１９番）に当たった。

ただそれだけだった。

まぁ、それはおそらくであって、本当は智野の意志ある行動であったのかもしれないが、２０ｍも離れた場所から当てるにはよほどの腕が必要なので、そんなことはないだろう。

おそらくは。

【残り３８人】

１４．本当にストーカ参上。

たったったっ

同時刻、藤真　鈴華（女子１４番）とはまったく逆、はるか南の方角で鷹代　仁（男子１０番）は走っていた。

――さっきからいろいろな銃声が聞こえる。俺、殺される!!　だって、さっきから誰かが追ってきてるし！

耳にするいくつかの銃声。

恐怖のあまりただひたすら音のしない方へと仁は逃げていた。

その最中だった。

「待って、仁君。待って」

後ろから自分を呼ぶ声がしたのは。

「っ」

反射的に仁は足が緩む。そして、なんだろうとつい反射的に振り向いてしまう。

「だ、誰？」

（だめじゃん。これでやる気のやつなら、俺は殺されるよ）

後悔しても遅かった。

「はぁ……はぁ……仁君。足、速いよ……」

幸いそれはそれはクラスの女子、船崖　珠未（女子９番）だったからよかったってだけの話だ。

クラスの中でも結構可愛い彼女はもたもたとした足取りで仁に追いつく。

「私、みんなが殺し合いするの恐くって……一人じゃ恐いから仁君のあとをつけてきたの。ごめんなさい。迷惑……だった……よね？」

珠未は半泣きであやまった。

――こんな俺の事を追いかけるために、涙を浮かべて一生懸命走ってきたなんて。

その様子を見て彼は確信した。きっと、彼女は『やる気』じゃないんだと。そうだ何も全員がやる気じゃないんだよな。と。

冷静さを取り戻したのである。

「そっか、女の子一人じゃ寂しいもんなぁ。どぉ？　俺と一緒に行動しない？」

優しく声をかける。親切な自分。これが、彼なりの答えだった。正しい発言だと思っていた。

「ありがとう。じゃそうす……」

珠未も安心したように言葉をもらし、嬉しそうに顔をあげた。
その時だった。
ぷすっ
一瞬の事で最初何が起こったのか仁にはよく分からなかった。
よく見ると珠未の首に針のような物が刺さっている。
「……え？」
仁がそう言葉をこぼすよりも早く、珠未の様子がおかしくなっていった。少女は恐ろしく震えている。唇の色は不気味な紫色へと変わっていった。
「うっうぐっ苦しっ助けて」
「助けてって俺は何をすれ……」
「……仁……く……ぶはっ」
口から血を吐き出し倒れ、珠未は一言も話さなくなった。
それは本当に一瞬の出来事で、仁には何が起きたか理解することも出来なかった。
「珠未、さん？」
後に残るのは不気味な静寂さだけ。
【ただの臆病者・船崖　珠未（女子９番）・死亡】

――なんだよ、なんだよ??　おい？　どーなってんだコレ？　1分前まで普通にしてただろ。なんで倒れたんだよ？　恐えーよ!!　マジかよ！

珠未が急に死んだのを見て、仁は気が動転していた。

当然ながら珠未が死んだ理由すら、今の彼には推測出来ない。彼はとっても苦手なのだ、ピンチってやつが。

――誰だ？　誰が殺したんだ？　ってことは俺もここにいたら危ないよな？　そうだ、逃げよう。

仁は船崖　珠未（女子9番）の死体やデイバックには目もくれずとりあえず走った。

自分は助かろう、ただそれだけのために彼はひたすら走った。

「はぁ、はぁ、なんで俺なんかの方を狙う奴がいるんだよ」

仁（男子10番）は力の限り逃げた。服はもうぼろぼろだった。彼の綺麗だった顔もぼろぼろになり、もはや別人のようになっていた。

目の前ではもうすぐ綺麗な朝日がのぼろうとしていたが、それすら気付くことはなかった。

――生きることだけが大事。

＝＝＝

「じ・ん・君。逃げられないよ。だって私、あなたをいつまでも追いつづけるんだから」

鷹代　仁（男子１０番）が必死に逃げ惑うはる後方。彼に見つからないように、散倉央（女子１２番）はひっそりと後をつけていた。
別名・ストーカー。
仁は彼女に取ってとても好みの男性だった。何せ顔がいい。有名俳優に似ていると言われていることもあった。
そんな彼を央はとても大好きだった。（仁は央の気持ちを知らなかったが）
だからこんな状況になった時、彼女の取る行動は決まっていた。
央のとる行動、それは、仁に近づく者は全て排除するというもの。
現に先ほど船崖　珠未（女子９番）が彼女の愛の犠牲者となった。
「だめよ。他の女としゃべったりしたら。殺されちゃうわよ。私みたいな人にね……」
そうつぶやくと、央は大事そうに。珠未を殺した吹き矢（毒入り）を自分のディバックにしまいこんだ。
そして、走っていく。仁の足音を追いかけながら。
好きな人。……私が殺してしまいたいくらい……

【残り３７人】

15．♪♪♪

「ララッラッラー♪　ふーん、ふふーん♪」

学校から北西の方角にある洞窟。そこに、クラス一いや日本一いや世界一歌がうまい（自称）水田　太一朗（男子１８番）はごきげんにも鼻歌を歌っていた。

「いやー洞窟って音が響くなー。いいな、ここ。最高のステージだぁ」

結構ここの場所も満足してきた、水田。

まるで自分の部屋で鼻歌を歌っているような清々しさではあるが、洞窟にいるのは彼一人ではなかった。

水田の友達、四川　八須尾（男子２１番）。彼もまたこの素晴らしい歌声を聞いているのだった。

四川は目立つ事を好まない男だった。

一言で言えば地味。話をかけられても、学校だと『あぁ』とか『うん』とか必要最低限の返事しかしない。朝、クラスメートに会っても、よっぽど親しくなければ挨拶さえしない。そんな、シャイな男だった。

そして水田の意見には絶対服従。
感じ方は人それぞれである。本人は最低限のことしかしていないだけのつもりだったが、水田にとってはそう見えたらしい。
クラス一のアイドル（自称）水田が四川と友達でいるポイントはそこだった。
自分を誉めて、自分を思いきり引き立たせてくれる。目立たせてくれる。だから、一緒にいた。

「それももう今日で終わりだな、四川」
「？」
水田は歌を止めると突然自分の支給武器である鉄パイプで四川の頭を殴り始めた。
最初、何が起こったのか、四川の頭の中では全く理解出来なかった。
また、理解した頃には、すでに頭を殴打されていたため意識もなかった。
一発。二発。三発。
四川の頭の中には鈍い感覚が残る。口の中も血でいっぱいだ。
「これで、とどめだぁ～!!」
すっかり水田はヒーロー気分だった。そして、それはもちろん歌のリズムに乗っていた。

ばきっ

そのとどめとやらを機に、もう四川は動かなくなった。

四川の死を確認すると、水田は四川の死体を洞窟の外の目立たないところに置いた。

「ふ～んふふふ♪」

またご機嫌に水田は歌い始めた。

――四川ぁ～お前の武器の銃（グロック１９）と食料はありがたく使ってやるよ。感謝しろよな。

――最後に残るのはこの、俺様だ。

【四川　八須尾（男子２１番）・撲殺・死亡】

「あれ、あそこにいるのって……」

水田が洞窟の中に入ろうとした所を七来　卓味（男子１２番）は見ていた。

彼に取って不運なのは、四川をの死体を運んでいる所と殺している所は見ていなかったことだろうか。

「おーい!!　水田君～」

何も知らない七来は大腕を振って呼びかける。

名前を呼ばれた水田は思わずびくっとした。
――もしかして、見られたか？
ひやりとした気持ちが押し寄せる。
「や、やぁ七来君じゃぁないか」
水田は自然体を装って、さりげなく笑顔で彼に言葉を返した。
「……？　どうしたの水田君？　なんか変だよ？」
「いや、いつもの事だよ俺が変なんて。あはは……さ、さぁ中に入りなよ」
――よかった。たぶん、俺が殺したのはこの様子じゃばれていないんだろう。
七来の平凡な反応から警戒されてはいないのだと確信した水田は彼を洞窟内へと誘った。
そこで七来はある事に気がついてしまった。
「あれ？　ディバックが二つあるね。……ってことは誰か他にもう一人いるの??」
――しまった、ヤバい！
水田はやや強引に機転を利かせた。
「ああ、もう一人いるんだ。ちょっとトイレに行ってくるらしいよ」
「なんだ。そうなんだ」
――よ、よし。うまくごまかせた。

水田は胸をなでおろす。
彼はこのまま異変に気付かれても嫌なので話をそらすことにした。
「ところで七来君の武器は何だったの？」
「僕はね」
七来はデイバックの中を漁り始めると一つの四角い箱を取り出した。
「コレ」
スズムシ育成セットだった。
「僕、動物を育成するの大好きだからよかったよ。でも、これじゃ殺し合いに乗ってる人に見つかったら死んじゃうけどね」
動物愛好家の彼は嬉しそう笑う。
彼の人懐こい笑顔、たれ目で敵意を感じさせない笑顔を見て水田は目を細めた。
――馬鹿だなコイツ。もう、見つかってるんだよ。俺に。
水田はばれないよう静かに銃を取り出し、七来の後頭部めがけて撃った。
だん
「えっ？」
七来はくらりと体がよろける。
やがてどさっという音とともに七来は絶命した。

「よし、二人目……」
少し反動で痛みが走ったが、それ以上の高揚感が彼の痛みを覆い隠す。
「ラララー俺は最強だぜー♪　来るならこーい♪　ラララーラララー」
七来の武器（??）のスズムシ育成セットにいたスズムシは、ただ「リンリン」と鳴く事しか出来なかった。
洞窟からは不気味な音が響いていた。
【七来　卓味（男子１２番）・銃殺・死亡】

七来が殺される瞬間を空東　千秋（男子５番）は目撃していた。
その時、彼の頭の中にどんな思惑があったかは分からない。
ただ彼は静かに洞窟のわきを通り過ぎていった。
【残り３５人】

16．探索

朝になった。時間は午前6時。
「そろそろ行こうか？　仲間集め」
そう言ったのは壁智　明流（男子16番）だ。
「ああ、行こう」
そう答えたのは幼稚園からの友達である海名　小卯（男子2番）。
二人は昨日聞こえた2発の銃声（宰春が雪絵を威嚇して撃ったもの）の方角に歩いていた。
自分達が居た場所とはそう離れてはいないはず。そう思って歩く事30分、辿り着いた先で二人は見てしまった。
棒葉　宰春（男子17番）と古月　昌成（男子7番）が地面に寝そべっているのを。
もちろん、息などはしていない。それは二人の死体だった。
「うわぁぁぁ!!!」
それを見て小卯は叫んだ。

「ちょっと」
　とっさに明流は叫んでいる彼の口を押さえた。
「おい落ち着け。誰かに見つかるぞ……」
　明流のめずらしく冷静な判断は見事に当たっていた。案の定、それは何者かに目撃されていた。
　草むらがガサガサと音を立てて揺れる。
「きゃーっ」
　耳御防ぎたくなるような金切り声と共に現れたのは佐羽　静枝（女子５番）だった。
　かちゃっ
　静枝は叫ぶと同時に、素早い動きで持っていた銃を小卯に向ける。
「こ……小卯君がやったの？　ねぇ、そうなんでしょ??　昨日の銃声、あれはあなたなのね??」
　静枝の腕はかたかたと震えていた。
「ち、違う、僕じゃないよ」
「嘘つかないで!!　古月君はマシンガン、宰春君はナイフ。それぞれ違う武器で殺されているのよ！　つまり、この二人を殺したのは二人組。そう、あなた達よ!!」
　――まるで、名探偵のように次々と判断を下す静枝。学校では新聞部に所属してい

て、その名をとどろかせている静枝の洞察力は半端じゃなかった。それはいい。でも、犯人は僕じゃない。

「俺らじゃないんだって、静枝さん。分かってくれよ」

明流も必死に無実を訴えた。

「嘘、嘘、嘘、嘘……嘘よ!!　私は騙されない」

ぱん

静枝は小卯めがけて銃を放った。確実に殺す気で。思いきり撃った。

これで2度目か。

クラスメートに銃を向けられた小卯の頭には悲しくも冷静にそんなことが浮かんでいた。やっぱり撃たれるのはいいもんじゃない。

ぱしゅん

彼女の手が震えていたせいか弾は大きく右にそれた。おかげで小卯にも明流にも、弾が当たってしまう事はなかった。

「ちぃ、仕方ない」

明流は舌打ちをしながら自分の支給武器を握りしめた。

催涙スプレー。

ぷしゅーー

煙は勢いよく、静枝の顔面めがけて噴射された。
「きゃああっ、な、何するの。め、目が」
静枝は必死に目をおさえた。うずくまる静枝。その様子を、小卯はただ呆然と見ている事しか出来なかった。
「おい、なにしてるんだ小卯。逃げるぞ」
「えっ？　あっうん」
明流に促されるまま、二人はひとまずその場を離れた。
【残り３５人】

17．火災発生。

本当に学校のすぐそば（禁止エリアに入らない程度）に安瀬　紗奈（女子1番）と岩敷　李阿（女子2番）は身を潜めていた。

紗奈は校舎を出発してすぐその場を立ち去ろうとはしなかった。クラスメートみんなを外で待とう考えていたのだ。

けれどそう思い通りにいく話でもなかった。

次に出てきた天根　俊谷（男子1番）にはあっさりと逃げられてしまったのだ。

結局その後も岩敷　李阿だけしか仲間に出来ず、今はこうして校舎裏の山みたいになっている所に座っていた。

「やっぱり、小卯君を仲間にした方が良かったんじゃない？」

紗奈は李阿の「やめた方がいい」と言う発言でみんなを待つのをやめた。

「何言ってるの紗奈ちゃん。あなたがあそこに出ていったら烏丸　智野（男子4番）に見つかって殺されていたのよ」

「そんなの出てみないと分からなかったでしょ」

「そうだけど……」

結局、出席番号が近かった自分達が合流した後は、全員が教室から出発するのを黙って見送るだけになってしまった。

もしかしたら仲間に出来たかもしれない、そんな人を次々と見送った。それが紗奈にはどうしても許せなかった。

でもそんな気持ちのまま彼女と一緒に居ることもそれはそれで今後の衝突に繋がるかもしれない。

「……もう過ぎちゃった事は仕方ないか。それじゃ、気を取り直して始めますか！」

自分に言い聞かせるようにして紗奈は勢い良く立ちあがった。

小さい頃からそうやって関係を維持していた。

幼稚園からずっと何をするにも一緒だった二人。お互いの事ならなんでもよく知っていた。

二人とも頭が良かったため、困った事があると絶対にどちらか一方が解決してくれる。この二人なら絶対に解決できない事はない。今回だって大丈夫。絶対にみんなを無事に脱出させることが出来る。

そんな自信があった。

「それで何をするの？」

李阿は訊ねる。
今回ばかりは彼女にも検討がつかなかった。
準備する物……ライター？
それは紗奈に支給された武器だった。
「ふっふっふっ……李阿クン、聞きたまえ」
「はい、博士！」
ようやく二人にいつもの調子が戻ってきた。
「これで、学校を燃やしてしまうのだ!!」
「えっ！」
すごい発想だと思った。
確かに燃やせばそれは全てなくなる（つまりプログラムも無くなる）がこんな事、許されるのか!?
「ふふっ……」
李阿は笑った。それに、つられて紗奈も笑った。それはとても愉快だった。
「じゃいっぱい木を集めてきてそれに火でも付けよ……」
ばんっ
一瞬の出来事だった。

クラッカーのはじける音よりもはるかに大きな音が李阿の耳に飛び込んだ。
「びっくりしたぁ」
音に驚いた李阿は思わず反射的閉じてしまった瞳を開けた。
そこで見てしまったのだ。首輪が弾け飛んだ紗奈の姿を。
「あれ、紗奈ちゃん？　首が」
少女の頭は目の前の現実をすぐに飲み込むことが出来なかった。
しかし時間はたっぷりある。ただただ静かな時間が無常にも流れていく。
李阿はようやく理解した。
「首、首がっ？　きゃあああああ！」
それはまるでホラー映画のよう。
紗奈の首がカクンカクンと揺れていた。血しぶきが李阿にも飛び散った。
ピーンポーン
少女の声をかき消すようにスピーカーから音声が流れる。
『あっ、あーっ聞こえるかな？　先生ですよー1回目の放送です。死亡した生徒読みます。
女子１０番　竹原　香さん、男子７番　古月　昌成君、男子１７番　棒葉　宰春君
男子１９番　群咲　馬胡君、女子９番　船崖　珠未さん、男子２１番　四川　八須

尾君

男子１２番　七来　卓味君、女子１番　安瀬　紗奈さんの以上８名です。禁止エリアを言います。

禁止エリアＡ―２でーす。次の放送はお昼だからね～以上』

ポーン

『あっごめん追加で放送。皆さんが何をやろうとしているのかはこっちのコンピューターでしっかり管理されてまーす。たくさん殺すのはいいけど変に学校を破壊するとか考えないほうがいいよ♪　特に今学校の後ろにいる岩敷　李阿さーん!!　お友達みたいになりたくなかったら気をつけようね』

ピーンポーン

全ての終わりを告げるように、放送のチャイムは無情にも鳴り響いた。

【安瀬　紗奈（女子１番）・死亡】

【残り３４人】

１８．許さない

放送は終わった。
誰もが音をなさない静寂の中、岩敷　李阿（女子２番）は静かに震えていた。それは恐怖にではなく、怒りの震え。
――許さない許さない許さない許さない許さない……
言葉を何度も頭の中で反復させる。こんなに怒ったのは何年ぶりだろう。
彼女は静かに顔を覆い泣いていた。
＝＝＝
同時刻。
我村　雪絵（女子２１番）は迫っていた。
先ほどの先生の放送を聞いて彼女は理解した。そこに誰かいるのだ。また誰かに会える。
彼女は全速力で学校へ向う。
あと、７０ｍ……６５……６０……その距離は徐々に近くなっている。

――アハハっ　二人目も簡単に殺れそうだよ。ほら、あと少し、後少しで見えるもん。この木の後ろが学校……

がさっ

ついに雪絵は草木をかき分け学校の裏と考えられる場所まで到達する。

これで二人目。その高揚感を抑えながら、岩敷　李阿に狙いを定め銃を持ちあげようと――

「……誰もいないよ?」

この場にいるのは雪絵だけ。

「逃がしたかな?」

雪絵は小さく首を傾げる。

逃げられたのだろうか。仕方なく雪絵はその辺をうろついてみる事にした。その時だった。

「あれ?　雪絵、雪絵じゃん」

女の子の声だった。

こちらからは見えない位置、声は校舎の影から聞こえてくる。

――ちょうどいい……餌食を一人発見したよ。

雪絵はクスッと悪辣な笑みを浮かべるとそっと引き金に指を伸ばした。

＝＝＝

一方……

――ちょっと、何やってるの??　え?　え?

さっきまで学校の裏で泣いていたはずの李阿は激しい混乱の中にいた。

それもそのはず。彼女は今、天根　俊谷（男子１番）に手をひかれて全速力で走っているのだから。

すごい、５０ｍが１０秒台だった自分が今は９秒台で走っているかもしれない。

スイスイと草木をかき分けて山を一気に駆け上る。

私にこんな隠された実力があったなんて。いや、そうじゃない。今はそんなこと考えている場合ではない。

――痛い、このままじゃ腕が引きちぎれる！

「……もう、離してって!!」

李阿は力のままに叫んだ。

「あ、ごめん」

そう言って俊谷はパッと手を離した。反動で李阿が少しよろける。これじゃまるで、お笑いコントだ。

「走るの、早すぎるよ」
体育が苦手な李阿にとって、俊谷のペースで長時間走ることは不可能にも等しいことだった。
そんな事よりも聞かなければいけないことがある。
「一体何しに来たの？　紗奈の誘いには乗らなかったのに」
李阿は俊谷を睨みつけた。
天根　俊谷。普段は昼寝ばかりしている癖に、なぜか頭の回転（それも、いたずら）と足の早さ（逃げ足）だけは速い男。
「お前なぁ～」
その言葉を聞いて俊谷は、たまらずと言った様子で言葉を返した。
「俺は別に助けなくても、どーでも良かったんだよ」
片手を上げてぷらぷらと面倒そうな雰囲気を見せる俊谷。
「は？」
「友達と心中したいならそのままそこに居ろってな」
「それってどういう意……」
その物言いにカチンときて、言い返そうと身を乗り出した李阿。けれどそこでようやく彼女もその意味に気付く。

「もしあそこであのまま居たら、殺して生き残ろうとする奴らが居場所を知って襲ってきたかもしれないだろ」
俊谷は気分が悪そうにぶっきらぼうにそう告げる。
その考えは全く当たっていた。現に雪絵は来ていたのだから。
――危険だって知ってたのにわざわざ助けに来てくれたんだ。私、それなのに失礼な事言っちゃった。
「……分かった、ありがとう」
李阿は素直にお礼を言った。
「別にいいよ」
俊谷は今度は彼女の歩幅に合わせるようにして先頭を歩いた。
――この人って、いつもやる気なさそうに見えるケド、本当はすっごくいいやつ……ＢＲで始まる恋もあるって☆そんな予感☆★
李阿の中には、少女漫画のような妄想が始まろうとしていた。
先頭を行く男は当然そんな気持ちなど知ることはない。ないからこそ、特に気取った様子もなくごく普通に淡々と言葉を続けた。
「助けようって言ったのは俺じゃなくてツゲだし」
「え」

「俺はアイツの差し金」

あくび混じりに彼はそう言うと、辿り着いた先、【消防車置き場】のドアを３０回叩いた。

「おーい、連れてきたぞ」

きい。

ドアが慎重に開かれる。

中からはもちろん今回の首謀者、津家　貴史（男子１１番）が出てきたのであった。

【残り３４人】

１９．変な

趣味に勉強に部活に今まで何でも一生懸命取り組んできた。
友達とみんなでカラオケに行ったり、教室で思いっきりふざけたり、いっぱいいーっぱい思い出があった。
これからもそれは続くと思っていたい。
干村　友木（女子１７番）は願っていた。友達と絶対に逃げ出そうって。
１回目の放送を聞いた時、友木はとてもショックを受けた。
もう、自分の知っている友達がこの世にはいなくなっている。ほんの昨日までは一緒に日常を共にしていたはずの友達が。いっそ全てを投げだしてこの世から消えてしまいたいと思った。
けれどそうしなかったのは、彼女にまだ希望があったからだ。
放送終了後間際に聞こえた『岩敷　李阿（女子２番）が学校の裏に居る』という言葉。
友木は確かに聞いたのだ。
その言葉を信じながら、友木は陸上部で鍛えた自慢の足で学校に向った。

――そこにいけば友達と会える！　絶対会える！

足はみるみる加速する。彼女の速度にはきっと誰も追いつけない。

こうして彼女が辿り着いた先。

そこに李阿の姿は無かった。

彼女は後悔した。

あと少しだけでいいから足が速かったなら会えたのかもしれないと。

けれどその直後だった。

「雪絵じゃん！」

我村　雪絵（女子２１番）と出会えたのは。

草むらの向こうから小動物のように姿を見せる少女。

友木は歓喜のあまり飛び跳ねるようにして彼女の元へと向かった。

けれど何故だろう。友木の目には雪絵の笑顔がいつもとは違うように見えた。色々な絵具をぐちゃっと混ぜたみたいな変な笑顔。

あれはいつの事だったか、授業参観で雪絵が数学の計算の答えを間違えた時があった。

その帰り道、みんなが親と下校する中、偶然私は聞いてしまった。

『あなたは我が家の恥』
そう雪絵の母が言ってたのを……
その時もだったな、雪絵の笑顔、すごく変だった。全ての嫌な感情がごちゃごちゃしてた。
今の笑顔もそれと同じだ。
あれ、なんで私、今そんな事思いだしたんだろう……

「変、だよ……おかし、いよ……」

友木の目から一筋の涙が零れる。
地面に横たわる彼女の体にはたくさんの穴が開いていた。そこからは見たこともないほど大量の赤い血が音も出さずに零れている。
雪絵に遭遇してすぐ、友木は彼女の餌食になった。
銃弾が彼女の体を食い破るのにそう時間はかからなかった。
「♪」
友木が終わりを迎えようとする隣で、少女は気もとめずデイバックから食料と水を抜いていた。

「これでよし♪」

そう言って何事もなかったかのようにその場を去っていく。

いつもの彼女らしくない変な笑顔を浮かべて。

【干村　友木（女子１７番）・死亡】

【残り３３人】

２０．苦手

「おいおい、どうしようなー俺らの他にもやる気の奴らがいるんだけど」
ここは放送が終了してまもなくのとある民家。
家の中には木蛇　鉄瑠（男子６番）芝見沢　朝陽（男子８番）奏草　浅之（男子９番）の三人が新たな獲物を待つべく隠れ潜んでいた。
隠れるといっても三人が集ってしまえば怖いものなど無い。これは力が物を言うゲーム。この三人を前にして力で勝てるなんてことはまず不可能に近いと彼らは理解していた。
「仕方ねーよ、そんな事はあらかじめ予想がついてたし」
そう言ってもう一度、斧を握りなおす木蛇。
負けるつもりはなくても油断は禁物である。
彼はいつ誰が襲ってきてもいいように、片手から斧を手放すことは無かった。持ち手は少し汗で湿っていた。
「でもさ、でもさ、群咲は死んじゃったぜ」
そう言って奏草は群咲　馬胡（男子１９番）の名を挙げた。

群咲　馬胡、ここに集うはずだった仲間の最後の一人。
はずだったというのは彼が既に1回目の放送で名前を呼ばれていたからだ。
群咲といえば自分達のグループの中では一番喧嘩の強い奴で、他人を殺す事はあっても誰かにやられて死ぬような男ではなかった。
でも死んでいた。
「あー信じられねー」
奏草は一人、頭を抱えてしゃがみ込む。
「落ち着けよ」
そう言いながらも芝見沢は考えていた。
喧嘩では負けない俺達だけど今回は話が違う。一人一人に支給された武器が問題だ。
最悪な事にここには使える武器と言ってもボウガンと斧くらいしかない。もしも、銃を持った奴に攻めて来られたら、まずいな……
少し長めの髪の毛が隙間風に吹かれてさらさらと揺れた。
「おいちょっとヤバくない？」
隣の部屋から木蛇が何かに気付いたように声をあげた。
「いいかげん、この死体をどけないとぜってーヤバイって！」
木蛇はそう言って地面にあったものを指差した。

そこには三人がプログラム開始直後に殺した竹原　香（女子１０番）の死体が転がっていた。
おかっぱ頭の少女が無残にも斧ですっぱり切断されている。そこからはなんとも言えない気持ち悪い匂いが漂っていた。
「じゃあ外に片付けるか……」
三人はその一言でその死体を片付ける事になった。
『それじゃ、じゃーんけーん……』

＝＝＝

「なんだよ……ったく……俺かよ……」
じゃんけんの結果、不運にも一人だけチョキを出した奏草は香の死体運ぶべく玄関で靴を履き替えていた。
こんな気持ち悪い事やりたくないのに。
ぶつぶつと小言をいいながら香の体に手をかける。そしてそれをひきずり運んだ。
ずるり　　ずるり　　ずるり　　ずとん
砂袋がひきずられるような音を出しながら、重くバランスも取れない体は不規則にゆるゆると揺れた。

「こんなもんでいいだろ」
大きなゴミを捨てるように、一つの体が外の草むらへと投げ出された。
「うわっ、汚っ」
手にべっとりと付いてしまった血を見て奏草は不快な声をあげた。
「最悪だし」
その言葉を残し彼は家の中へと消えた。
＝＝＝
「……」
彼の死角になる片隅で、その行動を無言で覗いている少女が一人。彼女の名前は聖礼千歳（女子８番）。
「最低。ああいう事する人なんて生きてる価値ないよね」
吐き捨てるようにそう言うと、彼女は奏草が消えていった民家の入り口を冷たく睨みつけていた。
【残り３３人】

２１．銃にも勝てる勝利方

教室で授業を受けてる時だっていつも真面目に先生の話を聞いてない。
決まり事だって守れない。先生に対してはいつもタメ口。
同じ世界に生きていると感じただけでも鳥肌が立つわ。
ねぇ分かるでしょ？　だから私はあなた達には一言も話しかけたりしないのよ。
私、あなた達みたいな駄目な人間が人を殺してると思ったのよ。そういう人は将来、立派な人間にもなれない。
生きてる価値なんて無いのよ。
……生きる価値無し。
死体を運び終え家の中に入る奏草　浅之（男子９番）。
その姿を見送って聖礼　千歳（女子８番）は自分の持っている武器を確認した。
それは１本の刀、日本刀。
千歳は剣道部に入っていたわけでもなく、特に刀の使い方が詳しいわけでもなかった。

ただ、これだけはよく分かっていた。
――これで人が殺せる。
普段であれば人を殺すなんて当然行っていいものではない。当然、千歳もそれは理解していた。
けれど今は状況が違う。仲良しこよしの平和な学園生活ではない、これは殺し合いなのだ。
千歳は冷静になって自分に言い聞かせた。
『危ない人間は早めに殺しておいた方がいい。これはみんなのためを思ってやるのだ』と。
あらためて自分の今すべき行動を整理し終えた千歳はゆっくりと玄関の扉を開けた。

一方その頃、家の中に潜む三人は少しもめる事態になっていた。
死体の処理から戻った奏草が妙に落ち着きを無くしていたのだ。
「なぁ……助かるんだよな？　俺達、絶対に帰れるんだよな？」
そわそわキョロキョロと不用意に部屋を歩く奏草。
彼はさっきの死体処理のせいで、若干精神が不安定になっていた。
「うたく。うるせーよ、さっきからお前は心配ばっかりして。なぁ朝陽、お前も何かこい

つに言ってやれよ」
それを見ていた木蛇もその不安が伝播したのか徐々に苛立ちを募らせていた。
みんなおかしくなっていく。この状況で頭が変になってしまいそうだった。
「心配ないんだよ。お前が気にする事じゃない」
その中で唯一、芝見沢　朝陽（男子８番）だけは冷静にその状況をみつめていた。
「悪かったな、お前一人に面倒な処理を押し付けて」
朝陽は優しく言葉をかけた。
「おい鉄瑠、こいつちょっと休ませてもいいだろ」
「別に、いいけど」
「ってことで休んどけ」
「ああ、ありがとう」
なんとか事なきを得た状況。
朝陽は壁にもたれかかって休息を取る奏草を眺めながら、全く別のことを考えていた。
――銃に勝てる必勝法。
今自分達は武器の面で間違いなく劣っている。
これから先、相手が銃を用いて襲ってきた場合、三人とも無傷というわけにはいかな

いだろう。
いつまでもこの家にいられる保証もない。それまでになんとかしなければ。
ちょうどそんなことを考えている時だった。
がちゃっ　　ばたん
玄関の扉を開閉する音が耳に届いた。
「誰かお客が来たな」
「おい、起きろ」
木蛇が奏草の肩をゆすった。
「う、ううん……」
奏草は起きて静かに武器を構える。
「よし丁寧におもてなししてやるか」
木蛇はそう言って卑劣な笑みを浮かべる。
二人はやる気だった。

そんな中、朝陽だけはまだ答えを出せずにいた。
――まずいな。非常にまずい。もしそいつが銃を持っていたら……
「銃に勝てる必勝法……か」

【残り３３人】

２２．カウントダウン

――さぁ……行くのよ。

玄関を開けゆっくりと中に忍びこむ。その動作はとても正確にそして冷静に行われた。

足元に点々と残る血痕。それは一つの部屋へと繋がっていた。

――たぶん、この部屋……いるんだわ。あいつが。

奏草　浅之（男子９番）が潜んでいるであろう部屋の入り口に背中を預け、聖礼　千歳（女子８番）は静かに息をひそめた。

彼女はまだ知らない。この家には彼一人では無く木蛇　鉄瑠（男子６番）、芝見沢　朝陽（男子８番）がいるということを。

＝＝＝

「へっ、ばればれなんだよ～」

「俺らを甘く見てもらっちゃ困るってーの」

そんな彼女の後ろ姿を、男達は物陰から密かに窺っていた。

実は既に彼らの姿はその部屋にはいない。
千歳が家に侵入したことに気付いた際、血痕の続く部屋をおとりに使おうという朝陽の提案のもと、彼らは急いで別の部屋へと移動したのだ。
侵入者の正体とその危険が事前に把握出来た三人は、何も気付かない彼女を横目にひそひそと会話を続けた。
「で、あいつの武器はなんだ？」
「わかんねぇ、でも長い棒状のものみたいだ」
その棒状の物は日本刀だったのだが、鞘におさまり千歳の影に隠れていたため彼らの目からは確認することが出来ずにいた。
「棒状？　なんだそれ？　ま、いいやコイツで攻撃すれば大丈夫だろ」
奏草は自信満々で竹原　香の支給武器のボウガンを見せる。
「それは止めた方がいい」
朝陽はあまりいい顔をしなかった。
「相手の武器が長い棒状の物だとしたら、こっちが攻撃する前にやられる可能性の方が高い。長いって分、相手の方が有利だからな」
「そ、そっか……じゃどうすればいいんだ？」
「相手より長そうな物を使え。それで相手をひきつける。その間に違うところからボウ

ガンを使えばいい」
「わ、分かった。おい鉄瑠、そっちに何かその辺に長い物無いか？」
そう訊ねられた木蛇はきょろきょろ周りを見まわす。
「んっと。あった！　あった！　ほれ」
「お、サンキュ♪」
奏草は木蛇から受け取ったそれを確認した。
「ラップの芯かよ！　おい、もっとマシなのないの？」
「ごめん、冗談。これでも使えよ」
そう言って今度は身近な所にあったゴルフバッグからゴルフクラブを抜いた。
「おーこれなら使えるな」
嬉しそうに奏草はゴルフクラブで2～3回素振りをする。まるで普段からその動きを行っているかのように、ゴルフクラブは軽やかに振りぬかれる。
「あっそーか、お前んちって道場やってたっけ？」
奏草の家は実家が古くから続く道場だった。
小さい頃からそこで育てられていた彼は、実はかなり武術が上手い。
まあ本人があまり人には恥ずかしくて披露しなかったので知ってる人は少ない話ではあるが。

「ま、そう言う事。ひきつけるのは俺に任せて」
「わかった。失敗すんなよ」
ひきつける役⇒奏草　浅之　　ボウガンで狙う役⇒木蛇　鉄瑠

＝＝＝
どき　どき
――次第に心臓の音が高まっていく。緊張も解けた。覚悟は出来てる。さぁカウントダウンして侵入しましょう。
千歳は胸に手をあて、静かに呼吸を整えた。目を閉じてゆっくりと数える。
――5……4……3……2……1……
ばんっ
ちぎれてしまいそうなほど力強く音を立ててドアが開く。
――さぁ、戦闘開始だわ。
【残り３３人】

２３．日本刀ｖｓゴルフクラブ

ばんっ
大きな音を立て、聖礼　千歳（女子８番）の手によって部屋のドアが開けられる。
「今だっ!!」
奏草　浅之（男子９番）はその瞬間を見計らい勢いよく飛び出した。
相手の動きに合わせるように飛び出すという所がいかにも実家で鍛えられた彼らしい。慣れたような動作で背後から相手の注意を引きつける。
彼は手にしていたゴルフクラブを大きく振りかざした。
ぶおん
重厚感のある空気を斬る音。
相手はギリギリのところでかわしたらしい。けれど別にそれでも問題ない。
「さぁ、早くやれ！　鉄瑠！」
奏草は木蛇　鉄瑠（男子６番）の名前を呼んだ。
彼が担うのは彼女の注意を引きつけること。
本命はそれに合わせて木蛇がボウガンで相手を仕留める手筈になっている。

――大丈夫。俺は生き残るんだ！　今だってほんの少し相手の注意さえ引きつければ、その隙に鉄瑠が矢を放ってくれる！　……死ぬのはあっちだ！

「ほら、早く！　どうしたんだ？　鉄瑠？　早く矢を放てよ!!」

興奮したように奏草は無我夢中で叫んだ。

でも肝心の木蛇が動かない。驚いたような顔で、ただ奏草の手元を眺めている。

「おい、本当にどうしたんだよ。鉄瑠？　まさかここまで来てびびって……」

ぱきっ　　カラーン

何かが割れて地に落ちたような音。

その普段滅多に耳にしないような独特の効果音が部屋の中に響き渡った。

奏草は音の出所に静かに目を向けた。

床に落ちている金属状の破片。

「うっそ……だろ」

手元にかかっていたはずの重さが無い。

それもそのはず。だって彼が握っていたゴルフクラブ先端から真中あたりまでがすっぱりと床に落ちているのだから。

日本刀がゴルフクラブをいとも簡単に切ってしまったのだから。

「え……？」

事実が飲み込めず唖然と床に落ちたそれを見つめる奏草。
――日本刀ってこんなに鋭かったか？　ゴルフクラブを切れるほどなのかよ。
そう思った時にはもう遅かった。
「馬鹿、何やってんだ！　避けろ!!」
朝陽の低い怒鳴り声。
「や」
やべえ。
そう口にするよりも早く、ゴルフクラブを切ったはずの刃が今度は奏草の太ももへと伸びていた。
ざくっ
肉の切るような音が耳に届く。
痛みはそれよりも早く全身を駆け巡る。
「あぁぁぁぁぁぁぁ！」
家の中いっぱいに悲痛な叫び声がこだました。
「痛えぇ!!　誰か助けてくれよ！　血がっ血がっ!!」
引きつるような声で奏草が仲間に助けを請う。
太い血管を斬ったらしく、太ももからはかなりの血が流れていた。

「えっ……あ……」
一瞬にして起こった血まみれで痛々しい友人の悲惨な姿。
木蛇はその衝撃にボウガンを持ったまま、動くことが出来なくなっていた。
その点、朝陽は冷静だった。
「鉄瑠、そのボウガンをよこせ」
彼はそう言うと鉄瑠から強引にボウガンを奪い取る。
「まったく……予想外だったよ。日本刀がそこまで鋭いとはね……」
芝見沢　朝陽（男子８番）はゆっくりと、ボウガンを千歳に向け狙いを定めた。
例え相手が女でも油断はしない。
決して外さないように、落ち着いて息を整えた。
「あれ？　歴史の授業で習わなかったの？　先生、言ってたでしょ。日本刀はよく切れるって……」
対する千歳はその気持ちをも嘲笑するように、淡々とした様子で彼に答えた。
「あぁそっか」
何かを思い出したように不意に彼女が笑う。
「あなた達って授業をまともに受けてなかったのよね。ごめんなさい」
冷たい冷たい彼女の言葉。

それは数の有利など関係なく、それとは別の恐怖というものが存在していることを感じさせる。

かちゃり

外の光に反射して彼女の日本刀が怪しく光った。

「……私ね、そんなあなた達みたいな人、大嫌いだったの」

【残り３３人】

２４．再起不能

――こんな事になるなら銃に勝つ方法より日本刀に勝つ方法を考えておけば良かったな。

ボウガンを聖礼　千歳（女子８番）に向けながら、芝見沢　朝陽（男子８番）はそんな事を考えていた。

見れば見るほど落ち着いている千歳の姿。

中学生のましてや女子が震えることも命乞いすることも無く、男三人に立ち向かおうとしている。

――あいつ……こんな状況なのに怖くないのか？　それとも、まだ何か裏がある？

その本来ではあり得ないような状況が、朝陽の頭ではどうしても合理的に解釈出来ない。

物事を納得いくまで考えすぎてしまう、それが朝陽の悪い癖だった。そしてそれは今回も彼の足を引っ張ってしまう。

ほんの一瞬だった。

ざくっ
ほんの一瞬彼の判断が遅かったばかりに、奏草　浅之（男子９番）の胸部にはざっくりと日本刀が突き刺さったのである。
千歳はなんのためらいも無く刀を振るっていた。
「えっ」
朝陽はおろか、実際に体を貫かれた奏草本人だって何が起こったのか理解出来ない。
ただじわじわと赤いしみが彼の胸元を染めていった。
「うわ……っ」
木蛇　鉄瑠（男子６番）が言葉にならない悲痛な声をもらす。
無音になる民家。今は朝だというのに不気味な静寂が場の空気を支配していた。
「まずは一人目」
千歳はそう言って奏草の胸に刺さっている日本刀を抜いた。
ずるり
糸の無いマリオネットのように奏草の体は床に沈んだ。
彼の命の糸は既にこの世から切り離されていた。
「あと二人、次はあなたね朝陽君」
「くっ……そが」

悔しそうな顔を浮かべた朝陽は、今度は躊躇なくボウガンの矢を放った。
ばひゅん
矢は風を切り千歳の胸をめがけて飛んでいく。
シュカッ
軽い発破音。
その矢は彼女では無く古い民家の壁にぶっすりと刺さった。
「壁か……」
そう言って次の矢を設置し再び放つ。
シュカッ　シュカッ
２発３発、朝陽は何回でも矢を放った。
けれどその矢は不運にも彼女の元へ届くことはなかった。
そしていよいよ、その矢が彼の手元からすべて消える。
「当たるわけないのよ」
最後に椅子に突き刺さった一本を平然とした顔で一瞥する千歳。
「あなた達みたいな人の攻撃が私には当たるわけが無い。馬鹿じゃないの？」
こつりこつりと床を歩くその音は、まるで死刑の宣告のように朝陽の元へと迫りくる。

朝陽はいよいよ部屋の隅にまで追いやられていた。
「……それじゃー時間稼ぎはもう終わりだな」
「時間稼ぎ？　何言ってるの？」
その言葉に千歳が不可解な顔を浮かべる。
朝陽は少し笑った。そして、大きく息を吸いこんで――
「鉄瑠！　ここは俺に任せてお前は逃げろ!!」
力の限り叫んだ。
「なーんだ……そーいう事……」
どすっずず……
千歳は刀を突き刺した。それはとても正確に、無慈悲に真っ直ぐ朝陽の体を貫いた。
ぽたっ　ぽたっ　ぽたぽたぽた……
床が彼の血で覆われていく。小さく出来た血の池が、太陽の光に照らされて輝いていく。
――あーあ、まさか……ここでやられるとはな……もう、終わりか。武器さえあれば……武器さえ……
それからゆっくりと朝陽の命は終わりを迎えた。
「全く余計な事をしちゃったわ。おかげでこれ、使い物にならなくなっちゃった」

千歳は冷たい表情で、自分がさっきまで使っていた日本刀を眺めた。
刀は朝陽を貫きざっくりと、壁の中へと突き刺さり、千歳の力ではもう抜けるものではなくなっていた。
「まさか、あなたが自分を犠牲にして友達を逃がすとは思わなかった。それは誉めてあげる」
千歳はそう呟いて、さっきまで男の持っていたボウガンとその矢を拾い集めた。
「これも貰って行くわね」
千歳は３人分の水と食料をデイバッグに詰めた。
「あ、それと言い忘れてたけど」
退出しようとした足を止め、彼女は振り返らずに立ち止まる。
「……あなたが鉄瑠君に逃げろって言ったあの時……もう、彼は居なかったわよ」
しかし、死体に話しかけても、ただむなしい沈黙が続くだけで、彼女の耳に返答が届くことはなかった。
【芝見沢　朝陽（男子８番）奏草　浅之（男子９番）・死亡】
【残り３１人】

25．臆病者

――へへっやった、俺は生きてる。生きてるんだ。

すごい勢いで民家から飛び出した木蛇　鉄瑠（男子6番）。彼は体力のあるままに道路を全速力で走っていた。

確かあれは奏草　浅之（男子9番）が刺された頃だろうか。絶対このままじゃやられると思った木蛇はとりあえず逃げた。家の中にはまだ芝見沢　朝陽（男子8番）が居たけれど、彼がどうなろうと知ったこっちゃなかった。

友達のために自分を犠牲にするなんて馬鹿げた話だ。

俺が生きている。

これだけでもう十分だった。

――最高！　俺一人だけでも生き残ってやるよ。

限界まで走りきり、彼はようやく足を止める。

もうそこには誰もいなかった。さっきまでいた友人も、自分を狙った馬鹿な女も。

「ははっははははっ」

心の底からは自然と笑いがこみ上げてきた。
「そうだ、みんなをとことん利用してやる！」
彼は空に向かって叫んだ。
みんなと仲良くなって油断した所を殺してやる。どうせ最後は一人なんだ。
彼の心に迷いはなかった。
「あ、やべえ」
ふと、自分の手元に目がいった。
慌てて飛び出してきたため、武器が無い。せっかくだからさっきの民家で何か貰ってくればよかった。
彼がその失態に後悔をした、その時。
ぎちぎち
「……ん？　何だ？」
何かを無理矢理引き伸ばすような不思議な音が彼の耳元に届いた。
でもさっきは周囲に誰もいなかったはず。
木蛇は念のため確認しようと、音のする方に首を向けた。
ひゅん　　ぶすっ
「……は？」

軽い何か飛ぶような音の後、彼の頭は後ろに揺らいだ。
おでこには角が生えたような一本の矢。
「は、はは……なんだよコレ」
そう呟いて、仰向けになるように、彼はふらふらっと力なく倒れた。
――……なあ、俺を狙うなんていい度胸しちゃてるんじゃないの？
混濁する意識の中で彼は思う。
――俺には友達がいるんだ……そいつらは俺より強いんだ、後でどうなっても知らな……
そこで彼の意識は終わりを迎えた。
彼の言う友達のいる、天国へ向ったのだろう。たぶん。

「何も持たないで外をうろつくなんて危ないんじゃないかな？　鉄瑠君」
彼が息を引き取って数分後、３０ｍくらい後方の電柱、その影から見るからに人のよさそうな少年が姿を現した。
音島　清人（男子１５番）。
彼の手には弓道で使うような弓矢が握られていた。
「何を考えたかは知らないけど、こんな開けた場所に武器も無しに棒立ちするなんて、君

に不安はなかったの？」
清人は木蛇の元へと歩みより、そっと顔を覗き込んだ。
頭に刺さったそれを除けば、その姿はただ普通に眠りについているようだった。
「まぁ僕にも不安はあったよ」
突き刺さった矢を指で撫でながら、彼は優しく語り掛ける。
「１つ目はこの支給武器が上手く扱えるかどうか。２つ目は素人の僕があの距離から命中するかどうか。そして３つ目はまだ他に仲間がいるかどうか」
チラリと後方を確認し、彼はその静寂に耳を傾ける。
優しい目がキュッと細まった。
「３つ目の不安は、まあ……誰も出て来ないところを見ると、君一人しか居ないみたいだね」
問題集の答えを解説するように、丁寧な口調で彼は言った。
「本当は鉄瑠君に気付かれると思ってた」
清人は彼の衣服に触れ、改めて彼が武器を所持していないことを確認する。
本当に武器は無いらしい。
「君が本当に……」
突き刺さった矢に手を伸ばし、清人は力のままにそれを引き抜いた。

狩りで仕留められた動物を見るように、思いの外抵抗なくそれは抜けた。

「馬鹿で良かった」

午前１０時の事だった。

【木蛇　鉄瑠（男子６番）・死亡】

【残り３０人】

２６．活躍しない主人公

「あーあ、仲間集めって案外簡単にいかないのな」
壁智　明流（男子１６番）と海名　小卯（男子２番）は相変わらず二人で行動していた。
本来ならばクラスメートの一人や二人と合流しておきたいところである。けれどそうなっていないのは、佐羽　静枝（女子５番）を仲間に出来なかった時のことが大きい。
古月　昌成（男子７番）と棒葉　宰春（男子１７番）の殺害現場で遭遇してしまった二人は、運悪く彼女に犯人だと疑われてしまったのだ。
犯人を否定しようにも受け入れてもらえない。結局二人は、その場を立ち去ることしか出来なかったのである。
「信用してもらえないっていうのはかなり痛いね」
「信用かぁ～」
ついこの間までは仲間を沢山作ろうと意気込んでいたのに。
思いがけなく生じてしまった障害を前に明流はがっくりと肩を落とした。

「こうしている間にも、みんなが殺し合いをしているのかもしれないのに……これじゃ奴らの思う壺だ」
　小卯は淡々とそう告げた。
「お前冷静だな」
「まさか」
　明流の言葉に小卯は自嘲的な笑みを浮かべた。
「正直かなりイライラしてる。こんな最悪のゲームを仕向けた奴らにも、静枝さんの一件以降、また拒絶されるんじゃないかって怖がって次の行動に移せない自分にもね」
「そんなもんか」
「まあね」
　その辺の木に腰かけて、小卯はゆっくりと空を見上げる。雲一つないお天気で、こんな状況なのが馬鹿馬鹿しいくらいに思えた。
「んじゃさ」
　大きく背伸びした明流が小卯に向けて語り掛ける。
「もう一度くらい頑張ってチャレンジしてみる？」
「チャレンジ……」
「だってほら、ここで諦めたら試合終了って感じするし」

どこかで聞いたフレーズを並べながら明流はもっともらしく腰に手を当てた。
「そうと決まれば移動しようぜ」
ディバッグを担いで動き出そうとする明流。小卯は短く制止かけた。
「いや、待った」
「なんだよ」
不思議そうに眉が潜む。
「手あたり次第に声かけるんじゃなくて、信用してもらえそうな相手に声をかけよう。現状、既に殺し合いに乗ってる人間もいるし、錯乱している人間もいる」
静枝の件も踏まえた小卯なりの判断だった。
「信用してもらえそうな……って、例えば誰？　津家と天根とか、女子だったら江口……あたり？」
「うん、まあその辺りかな」
小卯は短く頷いた。
本当は江口　みほの（女子3番）の名前が出た時、一瞬気になる事はあったがそれを口にはしなかった。
江口　みほの。
このゲームのスタートが男女交互の出席番号順である以上、小卯が外で待ち構えてい

れば必ず出会えたはずの少女。
けれど小卯が彼女に遭遇出来なかったということは、もしかすると避けられていたのかもしれない。
でも、誰とでも気軽に打ち解ける彼女が、本当にそんな事するだろうか……？

「まずは人の居そうな湖にでも行くか？」
次の行先を探るように地図を広げていた明流の言葉に小卯は我に返った。
――そうだ、今はそんなことを考えている場合じゃ無い。
「うん、明流に任せるよ」
そう言って、自分の荷物に手をかけた。
「おっとそうだ。そういえば気になってたんだけど」
「何？」
地図に印をつけ終えた明流がそのペン先を荷物に向ける。
「武器、何が入っていたんだ？」
「え？　ああ、見てなかった」
ついつい流されるまま現状に至っていた小卯は、武器を確認することをすっかり忘れていた。

「お前、冷静なんだか天然なんだかどっちだよ」
「だって別に殺し合いとかするつもりなかったし」
「や、そうだけど。自分の身を守る事ぐらい考えてもよかったんじゃねーの」
「そうだよね……あった、これみたいだ」
　出てきたのは硬くて丸いボールのような物だった。それが小卯の手の中にすっぽりと収まっている。
「しゅっ……手榴弾？」
　手榴弾が２個、彼の武器はそれだった。親切に説明書まで付いている。
「守るっていうより、攻めるって感じのアイテムだね」
　その不気味な感触と重さを肌で味わった小卯は、それ以上何も言わずにディバッグの底へとしまった。

　そして二人は湖へと向う……

【残り３０人】

27．脱出組

ここはエリアＥ―３【消防屯所】。
あまり大きくない古びた建屋の中には、岩敷　李阿（女子２番）、天根　俊谷（男子１番）そして津家　貴史（男子１１番）の３人が滞在していた。
俊谷は今はぐっすりお休み中。津家は自分の首に付いている首輪をいじっている。
そんな中、李阿は一人、玄関口に腰かけその扉を見張っていた。
「はぁ……」
彼女の脳裏に浮かぶのは、友人の安瀬　紗奈（女子一番）の首輪が爆発した光景。
彼女は死に、私は生き残った。
人はそれを運命と呼ぶのかもしれない。
そんな四文字で片付けてしまえるほど、あの出来事は軽いものでは無く、今でもあの時の衝撃はついさっきの事のように蘇ってくる。
――これからどうする？
李阿は改めて思考を巡らせた。

ついちょっと前までは、紗奈をこんな目に合わせた奴らに復讐してやろうとしか考えていなかった李阿だが、ここに来て頭を冷やす時間が出来たおかげか、その考えも少し変わった。

たぶんこのまま立ち向かっても復讐は出来ない。

それは自分と紗奈の会話が筒抜けで、いとも簡単に首輪を爆破させたことからもよく分かる。

「はぁ」

再び李阿はため息をついた。

復讐は難しくても、何か相手が嫌がることをしてやりたい。

その一手が未だ彼女の中に浮かんでは来なかった。

「ちょっと二人とも来てくれ」

ふと彼女の思考を遮って津家が二人に呼びかけた。

李阿が、紗奈との一件から盗聴されている可能性を教えて以降、彼は興味深そうに首輪をずっといじっていた。そんな彼が何の用だろう。

「何、津家君？」

李阿は念のため玄関の外に誰もいないことを確認してから、津家の元へと向かった。

途中、寝ぼけ眼の俊谷が視界に入る。

彼はまだ夢の世界の途中なのか、のろのろとした動きで津家の近くへと寄った。
「なんだ、津家。何か用か？」
しかし、訊ねたところで言葉は返っては来なかった。
代わりに彼に支給された地図の裏に、ペンで小さく文字が書かれる。
【これから大事な相談をする。ただこの首輪には盗聴器が入っていると想定されるため、内容は全て紙に書く。怪しまれない程度に適当に会話をしてくれ】
その紙を見るなり俊谷はにんまり笑った。
声には出さなかったが、「待ってました！」と言いだしそうな表情である。
二人の同意を確認し、津家は適当に話題をきりだした。
「この建物、変な音がしないか」
「あーそういえば」
「見た目も古いし、歪んでいるのかもしれないね」
本当に、本当にくだらない会話だった。
しかしそのくだらなさに反比例して津家は一生懸命文字を綴っていた。
「俺はもしかしてこの家に幽霊でもいるんじゃないかって思ったんだけど」
【もしかしたら脱出できるかもしれない】
「なあ二人とも、幽霊って信じるか？」

【上手いくかは分からないけど俺を信じて着いて来てくれるか？】

その文字を見た俊谷と李阿は目を大きく開いた。

二人は声を揃えてはっきり言った。

「もちろん！」

【残り３０人】

28．それぞれの道

ここはC―6地点、【学校エリア】
丘を背にして大きく構える木造校舎のとある一室、多数のモニターが並ぶその中央に一人の男の姿があった。
国守　誠。今回のプログラム担当教官である彼は、映し出されるモニターの映像を一つ一つを興味深そうに眺めていた。
「どうですか。今回の生徒たちは」
声をかけたのは軍隊の中でも一番偉い、指揮を執る立場の男だった。
「ん、まぁまぁなんじゃないの？」
まるで友達と雑談をするかのような軽い口調。
男をちらりとだけ確認した誠は質問の回答を終えると、何事も無かったかのように再びモニターに注目した。
「……そうですか」
軽くあしらわれた男は、文句も言わず彼の後ろ姿を眺めた。

狼と羊。

一見するとそのくらい貫禄差のある二人。

とても不思議な光景だった。

「今回もどうせ脱出できないだろうなー脱出したら面白いのに……」

担当教官にあるまじき発言、呟いたのは誠だった。

脱出とは、最後の一人になるまで行うべき殺し合いから、存在ごと離脱してしまういわばズル行為である。

当然、そんなこと親元は認めてはおらず、万が一脱出行為が成功した暁には、関係した担当教官含む兵士たちの首が全て飛ぶ。お世辞にも口にしていい発言では無い。

「……」

男は黙って後ろ姿を眺める。

そして静かに言葉を飲んだ。

「……」

誠はその沈黙においてもにこにこと変わらぬ笑みを浮かべていた。

＝＝＝

一方ここは、学校から真っ直ぐ南下した地点。

「困ったなぁ」

江口　みほの（女子3番）はそう言いながら、うろうろと生い茂る雑木林の中を一人歩いていた。

周囲に誰もいないのに一人呟くその姿。そこに、誰かに襲われるかもしれないという危機感はまるで無かった。

「道に迷っちゃったのかも。学校を出る時もそうだったんだよなぁ……」

彼女はいつもどこかズレていた。

今回だって、簡単に学校から外に出られるところを、何故か出口を見つけられずついうっかり校舎内で迷子になってしまった。

本来ならその状況に絶望するところだ（いや、それ以前にそんなことにはならない）。けれど彼女は違う。彼女はなんと、ごく普通にその辺の兵士に道を尋ねるという行為に出たのである。

本来なら兵士が一生徒に助力などあってはならない行為だ。当然彼らも最初はそうしていた。

しかしあまりにも、彼女が出口を見つけられずうろうろするものだから最終的には兵士が折れた。言葉で道は示さずとも、それとなく誤ったルートを塞ぎ、正しい出口へと

彼女を導いたのだった。
「でもあの時も結局出れたし何とかなるか♪」
結果、何も知らない彼女はこうしてここにいる。
海名　小卯（男子２番）が彼女と合流出来なかった事に不安感を募っていたが、なんてことない、こうした理由だった。
ちなみに補足すれば、彼女の出発したタイミングは、最後の一人である我村　雪絵（女子２１番）の出発するほんの少し前であり、一歩間違っていたら雪絵の最初の犠牲者になるのは彼女だっただろう。
「早くみんなに会いたいな。それでみんなで脱出出来たらいいな」
そんな事とは知りもせず、呑気に絵空事を並べながら彼女は雑木林を進んだ。そんな時である。
たたたたたっ
遠くから誰かの足音。それが凄い勢いでこちらに近づいてくる。
「えっ 誰?　誰??」
みほのは思わず足を止め頭を抱えてしゃがみこんだ。
だから相手も気付かなかったのだろう。草むらをかき分けた先で小さくなっている人影を前に、悲痛な声を上げた。

「ひいっ、人だ！　わ。殺さないで、待って、やめて！」
「その声は……仁君？」
「……ってその姿は、みほのさん？」
頭上にぴょこりと結ばれたパイナップルみたいな髪型のみほのを見るやいなやその男子生徒、鷹代　仁（男子１０番）は、安心したように胸を撫で下ろした。
「なんだ、仁君じゃーん」
みほのも仁だと分かると、途端に安心してその警戒を解いた。
「凶悪犯とかだったらどうしようかと思ったよ。知ってる人でよかったー」
むろんこの島に凶悪犯などいない。
まだ少し顔色の悪い仁を覗き込むようにしてみほのは訊ねた。
「どうしてそんなに怯えてるの？　凶悪犯？　ゆっくりでいいから教えて」
何故かこの島に自分達以外の凶悪犯がいると思い込んでいるみほの。
真剣な表情の彼女に、仁はぽつりぽつりと答え始めた。
「実は、誰かに狙われてる気がするんだ」
「誰か？」
「うん。誰だかは分からない。でも誰かが居る事だけは確かなんだ」
顔を覆って目を閉じる。

するとさっき目の前で起こった出来事がありありと浮かんだ。
「さっきだって珠美さんが……」
「珠美ちゃんがどーかしたの？」
船崖　珠未（女子９番）の名を聞いて、彼と一緒にいないことを不思議に思いながらもみほのは言葉を促した。
「なんか急に倒れて、首には針が刺さってて……俺、恐くて逃げたんだけど……」
「うんうん」
「その犯人が、まだ俺のあとをつけて来ている気がするんだ」
そう言うと仁の顔色は真っ青になった。
「そっか」
みほのは深く頷いた。
――やっぱり凶悪犯がいるんだ。
「よし分かった」
すくっと立ちあがるみほの。
「今からさ、あそこにいかない？」
みほのはずっと南の丘を指差した。そこには小さく小屋のようなものが見える。展望台だ。

「ここからならみんなが見えるでしょ。そこからみんなに呼びかけて集まってもらおうよ。あそこなら変な人が来ても一目で分かるし、人が増えればもっと心強いよ！」

良い案だと思った。

こんな場所に閉じ込められて変な事件に巻き込まれる私達。でもみんな集まればきっと怖くない。

「……えっと」

仁は沈黙した。

彼女の提案は彼女が思うほど１００％安全であるとは思えない。

「ね、仁君！」

「う、うん、分かった。俺みほのさんを信じるよ」

けれど結局彼は彼女の提案を拒絶することは出来なかった。

判断するよりも、誰かの意見に身を委ねた方がいいと思ってしまった。

こうして彼らは展望台へと向かった。

＝＝＝

「なんなの、なんなのあれ？　私の時は逃げ回ったくせに、みほのならいいわけ？」

散倉　央（女子１２番）は睨むようにして二人の姿を木の陰から覗いていた。
本当だったら私が真っ先に追いついて、あのポジションになっていたはずなのに。
珠未を毒矢で殺害後、偶然を装って合流しようとしていた央は、仁が突然逃げ始めたことに動揺し一歩出遅れてしまっていた。
「許せない。いくらみほのだからって近づくんだったら容赦しない」
央は苦々しく言葉を口にすると、ディバッグから吹き矢を取りだしそれを強く握りしめた。

【残り３０人】

２９．危機一髪ゲーム

やっぱり最後に生き残るのは俺だ俺、俺に決まってる。
なんせあのクラスで一番信用があるのは俺だからな。
信用さえあればなんだって出来る。
信用のあるやつの言う事なら誰だって聞く。
でもな、信用がある奴だって裏切らないとは限らないんだぜ？

ここはエリアＡ―５【洞窟】。
そのぽっかりと空いた黒穴の奥からは個性むき出しの悪趣味な歌声が響いていた。
水田　太一朗（男子１８番）。彼は飽きもせず、大好きな歌を思いのままに歌っていた。
「ラーララ♪　んふっふーあーララ♪」
決して上手いとは言い難い不安定な歌声。
ここにもし聖礼　千歳（女子８番）が居たら、露骨に嫌悪感を露わにし日本刀で真っ二つにしていたかもしれない。

心優しい七来　卓味（男子１２番）が居たら、素直に拍手をしていたかもしれない。けれど暴言を吐く人間も褒めたたえる人間もここにいない今、彼の自己満足の一人コンサートは、その気持ちの赴くままいつまでも続いていた。

――まあしかし、俺が人を殺すだなんて、クラスメートの奴らは正直思いもしないだろうな。

水田は右ポケットに手を当てて銃の感触を確認する。

ごつりとした冷たいものが彼の手に触れた。

「ははっ」

それはまるで自分が最強であることを証明しているようで、彼の心に深い安心感をもたらした。

銃・グロック１９、元は四川　八須尾（男子２１番）の支給武器である。

――あいつも馬鹿だよな。俺が学級委員長ってだけであんなにも油断するんだから。

油断していた彼の体を鉄パイプで思い切り殴りつけたことを思い出し、水田は下卑た笑いを浮かべた。

「全く、みんなに心から愛される学級委員長ってのも罪なもんだぜ」

汚く言葉を吐き捨てると彼は再びコンサートを開始しようと口を開いた。

その時だった。

ピーンポーン

「うん？」

不安定なチャイム音が彼の歌声を遮った。

まだ聞きなれない不快な音。

それは定時放送の合図だった。

『こんにちは、お昼の放送です』

まるでニュースでも読み出しそうな爽やかな挨拶。

水田は何も言わず、片眉を上げると、おとなしく支給された地図とペンを取り出した。

『それじゃまず死亡した人を発表します。女子１７番　干村　友木さん、男子８番　芝見沢　朝陽君、男子９番　奏草　浅之君、男子６番　木蛇　鉄瑠君です』

「ふーん四人か」

特にメモを取ることもなく見知った名前を耳に流す。

別に自分が死んだわけじゃないし、その情報は彼にとってはどうでもいいことだった。

『それじゃ次は禁止エリアの発表です。今居る人は首輪が爆発しないように早く逃げてね。１０分後にＢ―５、その一時間後にＦ―８、以上です。みんな、頑張れー』

ピーンポーン

なんの励ましにもならない言葉と共にお昼の放送はあっさりと終了した。
「あと１０分でＢ―５……ここの隣か」
そう言って水田は洞窟をぬけたその先、距離的にはおよそ５ｍ先の地点をじっと見つめた。
「でもま、ここは地図で見ても間違いなくＡ―５とは被ってないし俺には関係ない」
むしろ禁止エリアに近いから余計な奴が近寄って来なくてかえって安心だと、彼は安堵の笑みを浮かべた。
おまけに最悪襲われることがあっても、この銃さえあれば十分対抗手段にはなり得る。
「唯一問題があるとすればこれか」
水田は支給武器に付属されていた弾薬ケースを取り出した。
一見、数は十分にあるように思える。けれど命中の頻度を考えれば決して安心できる数ではない。
七来を殺した時に思ったが、銃を扱うにはそれなりのテクニックがいる。
「節約は、した方がいいか」
水田はケースを胸ポケットへとしまった。
さっ　さっ

「ん？」
彼がケースをしまい込んだその時、耳に微かな雑踏音が届いた。
彼は静かに顔を上げる。
「あいつは……」
ショートボブの細身の少女、枠　望夢（女子２０番）。
彼女は不運にもこの洞窟の前を横切ろうとしているところだった。
可哀想な枠　望夢、さっきの禁止エリアの放送を聞いて、きっと慌てて移動しているのだろう。
――俺の所に来れば助かるのに……ま、そんな気は無いけどな。
水田は静かに銃を抜き出す。
望夢はまだこちらに気付いていない。
――どっちかって言うと今すぐ殺してやるよ。この銃で。殺すなら今だ！
引き金を引こうとしたその時だった。
――ん、待てよ？
彼の脳内にひらめく全く新しい斬新な作戦。
――これ、いけるかも。
水田はニヤリと口の端を持ちあげた。

「動くな！　望夢さん!!」
威嚇するような大声。
望夢の体がびくりと揺れた。
「手を上にあげてその場に留まれ。少しでも動いたら、撃つ」
恐る恐る言われた通りに両腕を上げる少女。
水田は銃口を彼女に向けながら、じわりじわりと洞窟の奥から姿を現した。

――このまま行けば銃弾を使わないですむぞ。題して強制自爆作戦。ははっ、俺ってカッコイイ上に頭良い☆
【残り３０人】

３０．冷たい目

＝前回のあらすじ【ｂｙ水田】＝

「動くな！　望夢さん!!」

銃を構えられた俺こと水田　太一朗（男子１８番）に出会った枠　望夢（女子２０番）。

銃を構える俺の姿はさすがカッコイイ☆

そんな中、俺をみつめる望夢さん。もしかして俺に惚れたって!?

【俺ｖｓ枠　望夢】もちろん、勝つのは俺サマ☆今日も華麗に決めちゃうぜぃ☆

＝＝＝

……つっこむのも嫌なほどアホな事を考えている水田を前に、望夢はじっと彼を凝視していた。

氷のように冷たい目。

望夢は幼い頃からこの目のせいで「何を考えているのか分からない」と周囲の人間からよくそんな言葉を浴びせられていた。

――こんなに私が真剣に見つめていても、誰も私の心なんて分かってはくれない。
そう理解すると自分の心が更に冷たくなっていくのが分かる。
――別に私はそれでいい。
――私の事なんて誰も考えてくれなくていい。
――私さえ生き残れば……
さぁぁっと風が望夢の前を通りすぎた。空には眩しい太陽。こんな爽やかな日なんてめったに無い。
日の光が目に差し込み、望夢は目を細めた。

「おっと、本当に動くなよ。撃つぞ」
力強く銃口を向け、水田は再度忠告の言葉を投げかけた。
洞窟の影に守られて外へと出て来ない彼に、天気の良さなど関係は無かった。
「おい、望夢さん。お前の武器を出しな……バッグごとだ。命が惜けりゃな」
命の権利はこちらにある、その確信のみが彼を強者の態度たらしめるのだった。
――どっちにしたってこいつは死ぬんだ。武器ぐらいは貰ってやらないとな。
今彼が頭の中に思い描いている作戦。それは実に単純なものだった。
銃を向けて禁止エリアに足止めする。

そしてそのまま自爆を誘発させる。勿論逃げても銃で殺す。
最悪、銃を使ってしまうが運が良ければ、銃を使わずに相手を一人葬れる。更に状況が噛みあえば新たな武器だって手に入る。
銃弾節約を考慮した彼なりの最適の方法だった。
「おい、何迷ってんだよ!! 死にたいのか、早くしろよ!」
水田はまくしたてた。
けれど望夢はこれだけ追い詰めているにも拘らず、武器をこちらに渡すどころか泣き叫ぶ様子も見せない。ただ無言でこちらをじっと見ているだけ。
――ほんと何考えてるか分かんない奴だな。
「……いいぜ、それなら今この銃でお前を撃ち殺すだけだ」
意を決したように水田は引き金に指をかけた。
一歩二歩、狙いを確実にするように彼女の元へと進んでいく。
「ちょっと待って」
飾り気の無い彼女の声がエリアに響いた。
「なんだ」
水田はまるでその声に反応したように足を止めた。
――止めてくれてよかったぜ。あまり近づきすぎて俺まで禁止エリアにかかったら

洒落にならないからな。
彼が内心安堵しているなどとはつゆ知らず、望夢はある一つの案を提示する。
「……2分考える時間を頂戴」
――2分か。
水田は腕に巻いていた時計をチラリと確認した。ただいまの時刻１２時７分３０秒を過ぎたところ。
そこが禁止エリアになるまであと3分も無い。この時間なら、望夢の判断が遅くてもほぼ確実に自爆か銃の餌食にすることが出来るだろう。
「分かった、2分だけ待ってやるよ」
彼女を確実な死へと追い込むことが出来ると確信した水田は、喜んでその提案を受け入れた。
――馬鹿だなコイツ。恐怖のあまり、そこがもうすぐ禁止エリアになるって事を忘れてるな。
水田は笑ってしまいそうになるのを必死で堪えた。
彼女の自爆まであと1分３０秒。
「あともう少しだぜ、望夢さん。このままそっちの荷物を渡さないようなら、君は死ぬ」
再度時計を確認する。あと1分。

「あと1分。時間が分からないようならカウントダウンしてやろうか？　５５……５４……５３……」

望夢は動かない。時間だけが刻々と流れ過ぎていく。

「２０……１９……」

２０秒を過ぎた時点でも、やはり彼女は動こうとしなかった。

「１０……９……そろそろお別れだな」

武器は手に入らないかも知れないがこの際仕方ない。

彼女を確実な死へと招待するため水田はカウントを続けた。

「５、４、３、２……」

これから来るであろう首輪爆破の衝撃音と、銃の反動に備えようと水田は少し身を引き締めた。

「いちっ」

そう告げるのとほぼ同時だった。

ドーン　　ズズズズズ……

深い唸り声のような音が周囲から聞こえてくる。首輪が爆発するにしてはまだ早い。

何事だと思い水田は天井を見上げた。

「石？」

こつんと小さな小石が彼の眉間めがけて落ちてきた。
「……え？　なんだこれ。天井が……洞窟が揺れてる？」
こんなタイミングで地震かと彼は思った。でもそうじゃない。
……それは、岩崩だった。
「え。え。まて、まてっ――」
ズン
まだ言葉も言い終わらないうちに水田の体を重たい岩の天井が塞いだ。
「……」
たまたま衝撃と共に水田の銃が外へと投げ出されていった。
足元に転がったそれを無言で見つめ、冷たい表情で拾い上げる。目の前の洞窟は既に岩に覆われていた。
時限爆弾、それが望夢に支給された武器だった。
本当は水田に気付かれず仕掛けて立ち去るはずのそれだったが、運悪く立ち去るところを見つかってしまったのだ。
幸いだったのは禁止エリア発動よりも若干早くそのタイマーをセットしていたことか。
「私、水田君に殺される気ないよ？　逆に私が殺すつもりだったし」

返答の無い岩の塊に向かって彼女は呟く。
「だって……このゲーム、生きるためには殺さないと駄目なんだもん、殺すに決まってるよ」
そう言って彼女は足早にこの場を後にした。

「……くくくっ何とか助かった」
崩れた岩をかき分けて、男の指がにゅっと生えた。
水田は岩に埋もれながらも辛うじて生きていた。銃を投げだし、生存本能の成すがまま、少しでも洞窟の外にと体を投げた結果だ。これを奇跡と言うのだろうか？
「あと少し、あと少しだ……」
もうちょっと広い場所へ。光を求めて手を伸ばす水田。その光が少しずつ視界に入る。
ピピピッピピピッ
突然、人工的な赤い光が彼の目に映った。
「な、なんだよ!!　ここは平気なはずだろう??!」
点滅を始める首輪のランプに水田は激しく狼狽する。
「馬鹿やめろ、違う！　よく見ろ！　ここは禁止エリアなんかじゃない。禁止エリアな

んかじゃ……」

ピピピピピピピピピ……ばんっ

洞窟の崩れたその場所はギリギリ間違いなく禁止エリアだったのだが、彼がそれを知ることはもう無い。

【水田　太一朗（男子１８番）・死亡】

【残り２９人】

31．再会

木の生い茂った山の中にぽつりと建つ古びた家屋。

鳴子　尋（男子13番）と徹田屋　江菜（女子13番）は山小屋に辿り着いていた。これも全て弐羽　一木（男子14番）の指示である。

彼から渡された探知機は、幸いにもここに着くまでも自分達以外の反応を見せることは無かった。

「それにしても、一木君と瀬里奈は遅いね……」

江菜はぽつりと親友の西　瀬里奈（女子16番）の名を出した。

本当だったら自分が彼女を正門で待っているべきだった。しかしそうしていなのは、一木が代わりにその役割を請け負ってくれたから。

けれど、その肝心の二人がお昼を過ぎても集合場所である山小屋にやって来ない。江菜は不安を募らせていた。

「昨日の夜の銃声、あれはやっぱり二人に何かあったんじゃないかな。大怪我してたらどうしよう」

昨日からずっとそんな心配ばかりしている。当然、一睡も出来ていなかった。
それに対してなんと非情なことだろう。
「すーすー……」
他人の心配などしてられないと言わんばかりに尋はぐっすりと寝息を立てていた。
「寝てるなんてヒドイよ」
江菜が恨めしそうに呟くがその言葉が耳に入ることはなかった。
彼は今、自身の支給武器であるタオルケットをかけて本当に気持ちよさそうに寝ている……。
ピーピーピー
「！」
突然、探知機のランプが光った。画面に表示される二つの赤丸。
江菜は急いで鳴子の肩をゆすった。
「鳴子君、鳴子君。起きて起きて！　多分二人が来たんだよ！」
「ん？　なんだ、敵か？」
支給武器のタオルケットを構える尋。当然無意味である。
「もう、いつまでも相当寝ぼけてないでよ！」
その文句と同時に山小屋のドアが開いた。

かちゃ
「ただいま！　なんてね」
明るくて元気な女の子の声、江菜の大好きな友達の声だった。
「瀬里奈っ」
江菜は玄関に急いだ。
「ただいま、江菜」
「おかえり」
いつもと変わらない友達の声。どこにも変わったところはないようだ。生きてて良かった。
「すごく心配したんだよ……どうしてこんなに遅かったの？」
「どっかの誰かさんがね。『俺は絶対こっちだと思う』とか言ってね、道を間違えたんだ」
「だから違うって！」
そう言って瀬里奈の後ろから姿を現したのは一木だった。
「あそこの道は危なかったんだからな！」
エリア【J―6】山小屋は、一番学校から遠い位置に所在していた。何が起こるか分からない。方々からは銃声が何発も聞こえた。
だから危険を考慮した一木は、わざと遠回りな誰も通らないような道を選んだのだ。

「はいはい、分かってるって、冗談だよ」
プライドを傷つけられたとばかりに憤慨する一木。
そんな彼を慣れ親しんだおもちゃを扱うようにして瀬里奈はあしらった。いつもの光景である。
「よかった、弐羽君も無事だったんだね」
江菜は零れかけていた涙を手で拭った。
「飯は、飯はまだか？」
尋は……まだ、寝ぼけていた。
「……」
「……」
「それじゃこれからどうする？」
瀬里奈は尋を見なかった事にして話を続けた。
「どーしよっか？」
ここで決める方針が自分達を生かす鍵になる。
慎重に決めなくてはと尋を除く三人は大きく頷いた。その時だった。
ピーピーピーと再び探知機が甲高く新たな人物の来訪を告げる。
「誰か一人この辺にいる」

一木のその言葉で、場は一瞬にして静まり返った。
探知機が探知出来る範囲はせいぜい半径１０ｍ、つまりものすごく近くに居るのは間違いない。
３人はいつでも逃げられるよう身構えた。
「いい加減本気で起きろ」
「痛てっ」
一木に思い切り引っ叩かれ、ようやく尋も覚醒する。
「相手がやる気なら……俺達は逃げるしかない」
包丁とふかふかのタオルケット、そして探知機を眺めながら一木は唇を噛んだ。
――さぁやる気なのか、そうでないのか教えてくれ。
四人の心に緊張が走る。
けれどそんな緊張も数秒後、あっけなく終わりを迎えた。
チリン　チリン　チリン
甲高い鈴の音。
それは山小屋に設置された玄関のチャイムのようなものだった。誰かがそれをご丁寧にも鳴らしている。
「丁寧だね、悪い人じゃないみたいだよ。出てみよっか？」

「おい！」
「あ、ちょっと馬鹿！」
なんでそう単純なんだ。
江菜は昔から疑いもなく直感で行動するところがある。よく言えば純粋、悪く言えば騙されやすい。
今回も、丁寧にチャイムを鳴らす＝いい人と判断したようだ。
「……っ」
瀬里奈の静止の言葉もむなしく、江菜はあっさりとドアを開けた。
「……」
「……」
唾を飲み込み身構える瀬里奈と一木。
いくらチャイムを鳴らしたからといって、相手がゲームに乗っていないとは限らない。
二人は相手の姿を睨みつけた。
「あっよかった。やっぱりここに入っていったんだ」
すらっとした容姿にどことなく薄幸そうな雰囲気を纏う少女、鳳凰寺　由利（女子１８番）は安心したように手のひらを合わせた。

「なんだ、由利ちゃんか～！」
江菜は素直に喜んだ。
「由利ちゃんなら安心だね。さ、中に入って」
「ありがとう」
由利の手をひいて江菜は小屋の奥へと消えていく。
その様子を瀬里奈と一木は眺めていた。
「……」
「……」
鳳凰寺　由利……
彼女という意外な訪問者。
ただその時は二人とも、それを無言で見ていることしか出来なかった。
【残り２９人】

３２．一人身の称号

友達。
今まで、私はこの言葉に何回も騙されてきた。
信じてたのに、ずっとずっと信じてたのに……
「由利ちゃん？　どーしたの、顔色悪いよ？」
そう言って、脇から顔を覗きこんだのは徹田屋　江菜（女子１３番）だった。
急に現実に引き戻されるような感覚。
「ううん、なんでもない」
私は取り繕った笑顔を彼女に向けた。
違う。本当はなんでもあるんだ……考えていたんだ……
でも、言えない。
また、裏切られるから。
「そう。ねぇ由利ちゃん、これから私、お昼作るけど嫌いな食べ物ある？」
江菜の元気な声はますます私の心を青くする。

「ない……大丈夫」
「なら、よかった♪」
『大丈夫』、その偽りの言葉に安心したのか彼女は台所へと向った。
私の心配なんかしなくていいのに……
ため息をつき、イスにもたれかかった。
イスのぎしぎしという音は、私の心の軋む音によく似ていた。
本当は今すぐにでもここから追い出したい癖に。ほら、あなたのお友達はお怒りよ。
私は視線を少し上げ、テーブルのその向こう側へと移した。
弐羽　一木（男子１４番）と西　瀬里奈（女子１６番）、二人が何も言わずこちらを睨んでいた。
当然だよね。私はあなた達、仲良しグループには入ってないものね。
私は理解してしまった。
訳も分からないまま参加させられた『殺し合い』。
死ぬかもしれない恐怖にさらされながら、やっとの思いでここに辿り着いた山小屋。
見つけたクラスメート。
こんな状況ならきっと、普段は口下手でみんなと仲良く出来ない私でも、仲良くしてくれる。そんな風に思ってた。

でもそれは、間違いだった。
彼女達の目が語っていた。『どうしてお前がここに来るんだよ』と。
……つまりはそういう事だった。
いつも軽々しく『友達』と口にする癖に、本当のところは嘘ばかり。心のどこかで選別してる。彼女は『友達』、私は『友達の皮を被せた何か』。
そんな状況が手に取るように分かるのが馬鹿馬鹿しくて、私は彼女達を心の中で嘲笑ってやった。

「あっ!!」
台所から聞こえた江菜の声。パリンという破壊音がそれに続く。それが皿の割れる音だというのは想像に難くない。当然犯人は江菜だろう。
「もー何やってんの！」
「やれやれ、仕方ないな。怪我はしてないか？」
瀬里奈と一木は立ち上がり、台所へと向かった。
彼女の割ったお皿の破片処理を手伝っているのだろう。
馬鹿馬鹿しい。馬鹿馬鹿しい。馬鹿馬鹿しい。
「あっ、ありがとう。二人とも！」

せっせと仲良く協力してお皿の破片を集める彼らの姿が目に浮かぶ。
また、私の心が青くなった。
――【困ってる時、助け合う人】それが友達ですよ――！
どこからかそんな声が聞こえてくる。

「……ははっ。私、困ってる時、助けてもらった事あったかな」
――おや？　あなた、助けてもらった事ないんですか？
「……ＹＥＳ」
――それじゃあなたは友達がいないんですね。
「……」
――おめでとうございます。あなたは一人身の称号を手に入れました。
「……」
――あなたに友達はいりません。さぁこれから何をするか、あなたならもうお分かりですね？
「……はい」

私は静かに立ちあがった。ディバッグの中に手を伸ばす。取り出されたのはしっか

りとした木の杭。
自分には一生使う事がないと思っていた支給武器。私はそれを今、しっかりと両手に握りしめている。
目の前には男。
ぐっすりとソファーで寝ている鳴子　尋（男子１３番）だった。
「馬鹿馬鹿しい」
私は思いきり両手を振り下ろした。
手にはしっかりと肉を貫いたような感触。
「……」
彼にかけられていたタオルケットに徐々に赤いしみが出てきた。
彼は死んだのだ。
たった今、この手で、この私の手で殺した。
突き刺さった杭は、私の意思を褒めたたえるかのように堂々とその姿を際立たせていた。
ＧＯＯＤ　ＢＹＥ．もう後戻りは出来ないわ。さよなら、自分。
【鳴子　尋（男子１３番）・死亡】

【残り２８人】

３３．あなたは友達を信じますか?

私はあの時のその言葉より、目の前の光景が信じられなくて……目からは涙が出ていました。

〈女子１３番　徹田屋　江菜〉

「ねえ、これ……どゆ、こと?」

最初にそれを目にしたのは徹田屋　江菜（女子１３番）だった。

割れた食器を包もうと、新聞紙を探しにやって来たところ不幸な現場に遭遇してしまった。

「あれ?　見てたんだ。今の全部見ちゃってたんだ、江菜ちゃん」

不気味な半笑いを浮かべながら鳳凰寺　由利（女子１８番）は江菜に話しかける。

彼女の目の前には木の杭が刺さった鳴子　尋（男子１３番）がいた。

「な、んで……?」

途切れ途切れになる言葉。

江菜の目から大粒の涙が零れ落ちていた。
「私、やる気だから。覚悟してね……」
今の由利にどこか控えめな少女の姿は無い。
狂気。そう名付けるに相応しい程に彼女の風貌は変化していた。
するり。滑らかな手つきで彼女は放置されていた江菜のディバッグに手を伸ばす。
「だ、駄目！」
彼女の言葉などお構いなしに、由利は支給武器である包丁を取り出した。
「こんな大事な物放置してるなんて、頭湧いてるんじゃないの？」
間髪入れず江菜に包丁をつきつける由利。
もう一人、ここで殺す、彼女はそう考えていた。けれどすぐに、それは甘い考えだという事に気付く。
「動かないで」
江菜の異変を察知して、台所から弐羽　一木（男子１４番）と西　瀬里奈（女子１６番）が姿を現したのだった。
「今、ここで江菜を刺したら、あなたを撃つ」
瀬里奈の手には彼女の支給武器であるハンドガンが握られていた。
「駄目だよ、瀬里奈。そんな事、言わないで……友達を傷つけるなんて、理由があっても

やっちゃいけないよ」
　江菜は自分が殺されるかも知れない恐怖を感じながら、弱弱しくも可能な限り声に出して伝えた。
「大丈夫、私は全然気にしてないから。たぶん、由利ちゃんも恐かったんだと思う。だから瀬里奈、その銃を下ろして。由利ちゃんも包丁を置いて……」
「馬鹿っ」
　この状況で一番恐いのは包丁をつきつけられている江菜のはず。それなのに、相手を想って和解を提案するなんて。
　こんな時でも揺るがない彼女の争い事は好まない提案に瀬里奈は唇を噛んだ。
「私、由利ちゃんの事、信じてるよ。だって、友達じゃない……」
　もちろん由利にも、その言葉は綺麗ごとを並べているようにしか思えなかった。
「……ちっ黙れよ」
　由利は小さく悪態をつくと、叩き付けるように包丁を地面に置いた。
「良かった。分かってもらえ……」
「うるせえ、友達なんかじゃねーよ」
　彼女はそう吐き捨てると、自分のデイバックを肩にかけ山小屋を去っていった。
「大丈夫だった?」

とっさに瀬里奈が駆け寄る。
「……うん」
江菜は首を縦に振った。
「よかったー」
安心する瀬里奈。
けれど江菜は嘘をついていた。

『友達なんかじゃない』
それは最後に由利が言った言葉。
その言葉は江菜の心に深く突き刺さった。
木の杭が心に刺さるような、とてもとても重く悲しい痛み。
――思い出したくない。思い出したくない。恐い。恐いよ。誰か、助けて。
江菜の中に、昔の嫌な出来事が蘇りつつあった。
【残り２８人】

３４．ウイリアムさん。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

――見えない。目がちっとも見えない。

森の奥で必死に目をかきむしる佐羽　静枝（女子５番）。彼女の視力は急激に低下していた。

理由は簡単。壁智　明流（男子１６番）のあの催涙スプレー。

一般に売られている催涙スプレーなら、もうとっくに効き目は切れている。

しかし静枝が今でも苦しみ続けているのは、彼女に噴射されたスプレーが政府が特別に作らせた超強力なものだったからだ。目なんて３日あれば失明してしまうだろう。当然彼女がその事実を知るはずもない。

――今は何時かしら？　あの放送があってそんなに経っていないと思うから、お昼近くよね。落ち着かないと……落ち着かないと駄目……まずは食料……

片手に銃を持ち、しゃがみながら静枝はディバッグを手探りで探し始めた。その時だった。

「？」

ふわっとした温かい風が優しく静枝の頬をかすめた。

「誰かそこにいるわね？」

じゃりっという足を止める音が彼女の耳に入る。

相手は少し驚いたのか立ち止まったようだった。

「誰？　答えなさい。撃つわよ」

静枝は見えない相手に銃を向けた。

もちろんそうは言ったものの静枝は何も見えてはいない。虚勢だけが彼女を支えていた。

――やばい、このままじゃ私の方が圧倒的に不利……どうしよう。どうすればいいの？

鼓動は大きく高鳴る。目が見えないせいか、それはとても大きな音として聞こえているような錯覚を覚えた。

「……」

返事は無い。代わりに、近くにいる【誰か】はガサガサと音を立て移動を始めた。

「！」

――恐い。目に見えない誰かが襲ってくる。

今の彼女には葉が擦れる音すら恐怖の対象なのは間違いない。
けれどその中で彼女は冷静さを取り戻そうと、必死に自分の心に語り掛けた。
――駄目、こんな事じゃ駄目。立派な記者になれないわ。耳で聞いて相手の場所を把握するのよ。
ゆっくりと呼吸を整える。落ち着いて耳を澄ます。ガサガサとした物音。不気味に足音だけが近づいてくる。
――……左!!　左だ!!
静枝は持っている銃を左に構えた。
――まだだ。相手が近づくのをもう少し待って……今だっ!!
静枝は左にいる【誰か】に向けて、思い切り銃の引き金を引いた。
弾けるような二発の銃声があたり一面に響いた。
空では無い。何かに命中したような音。弾は確実に左にいる【それ】に当たった。
自分の命が守れた事に安堵した静枝はそのまま地面にへたり込んだ。
――よ、よかった。これで私まだ生きて……
「えっ?」
静枝の口から驚いたような声が漏れる。
撃った先から聞こえてきた音は、あまりにも規則的なリズムを奏でてていた。それは

まるで水の音。
——まずいっ!!
とっさに彼女の頭の中にそんな言葉がよぎった。でも、それはもう手遅れで。
「うっ」
どすっという醜い音と共に、少女の低いうめき声が響いた。
彼女の背中には頑丈な矢が一本。
「あっ……これ……矢?」
手探りでそれを触り、小さく絶望的な声を漏らす静枝。
——驚いた。まさか、私の最後がこんなところで終わるなんて……
ゆっくりと1つに結われた彼女の髪が地面へと着いた。静枝は、絶命した。
【佐羽　静枝（女子5番）・死亡】
【残り27人】
「さすが新聞部、途中までの読みは良かったね」
絶命した少女に向けて、少年は語り掛ける。
音島　清人（男子15番）。彼は穏やかな笑みを浮かべ、彼女の手に握られていた銃を優しく引き剥がした。

「でもそれ、ペットボトルの水だったんだ」
清人は木へと目を向けた。
ぶら下げられたペットボトルから、水がたらたらと滴り落ちている。
彼のやったことはシンプルだった。
ペットボトルを木に吊るし、後は彼女が反応するように石を投げて誘導するだけ。背後を見せたら最後、弓を放つ。
「君が銃を持っていることだけが、脅威だったからね。おかげで安全に狙いが定められて助かったよ。まさかこれを撃っちゃうとはね」
彼女のディバッグを漁り、彼女支給のペットボトルを手元に移す。的としてはあまりに小さいそれに清人は目を細めた。

「命中おめでとう!!　君はウイリアム・テル並の腕だ」
彼は森の中で一人、嬉しそうにそう告げた。
【残り２７人】

３５．暴走

ぱんっというクラッカーの弾けるような音が二度聞こえ、壁智　明流（男子１６番）は足を止めた。
「なあ今の」
「ああ」
振り返ると海名　小卯（男子２番）が自分と同じように足を止めていた。
それがクラッカーの音でないことはすぐ分かる。ここからそう遠くは離れていない。
二人は銃声の聞こえた方角を静かに凝視した。
「静枝さんなんだけどさ……」
音のした方角が、ちょうど彼女と遭遇した方角だったからだろうか。明流は言いにくそうに佐羽　静枝（女子５番）の名前を出した。
佐羽　静枝。古月　昌成（男子７番）と棒葉　宰春（男子１７番）が亡くなっていた現場で、偶然遭遇してしまった人物であり、自分達をその犯人だと決めつけた少女。
「俺、催涙スプレーかけたじゃん」

「うん、かけたね」
　二人を殺人犯だと勘違いした静枝は二人に銃を向けた。そんな彼女から逃げるべく明流は静枝に向けて催涙スプレーを吹きかけたのだ。正当防衛と呼んでもいいだろう。
「あの後、大丈夫だったのかなって」
　けれど明流は罪悪感を感じていた。
「……」
　小卯は相変わらず銃声が聞こえた方を見つめていた。
　静枝のことはあまり詳しく知らない。知っていたとしてせいぜい、彼女が新聞部だとか中添　史織（女子１５番）と仲がいいとかそのくらいのこと。だから、明流の罪悪感に対して『大丈夫、気にしてないよ』なんてことを小卯は安易に言うことが出来なかった。
「一時的に目が見えなくなるんだぞ。万が一誰かに襲われでもしたら……」
「じゃあ行こう」
「え？」
「心配なら行った方がいい」
　小卯はがっしりと明流の腕を掴んだ。
「い、いやでも」

慌てて明流は抵抗した。けれど小卯はその手を離さない。
「正直なところ僕は何も出来ていない。戦うことも、友人に最適な言葉をかけることも何一つ。でも、この手を引くことぐらいなら出来るよ」
「何言ってんだよ。そんな事したら、俺達また危ない目に合うかもしれないんだぞ！」
「行かなくて後悔するよりはいいでしょ」
小卯の表情は真剣だった。
「……分かったよ、行こうぜ。湖に向かうのに、遠回りになるけどいいんだな？」
「全然問題なし」
二人は走って静枝がいるであろう場所へと向かった。
道なんて関係ない。青々と生い茂る草を適当にかき分けて、どんどん進んでいく。そしてとうとう、彼らは事実を目の当たりにする。
「な、なんだよっ！　おい、静枝さん!!」
おとぎ話のように都合がいいことなんて現実には起こらない。
それは遅かった。遅すぎた。
小卯の目の前には背中に矢が一本刺さった、佐羽　静枝が横たわっていた。荒らされたディバック。持ち去られたと思わしき彼女の小銃。事故では無い、誰かに殺されたことは明白だった。

「う、嘘だろ……おい」
小卯の背後で明流は今にも消えてしまいそうな声で呟いた。
自分が静枝を殺したのかもしれない。目が見えさえすれば招かなかった事態かもしれない。頭の中で何度もその言葉が繰り返される。
「落ち着け、明流。お前のせいじゃない」
「いや、俺がこ、殺したんだ……」
「違う」
「俺だ」
明らかにおかしくなり始める明流の様子。
彼を少しでもなだめようと小卯が手を差し伸べたその時だった。
「あ、あ、あぁぁぁぁ……!!!!」
「わっ」
彼の体を押しのけるようにして明流が飛び出した。
「待てよ、待てって!!」
小卯は慌てて彼の背を追った。
【残り２７人】